

第一部

リトールドと解説

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』 (アンと緑色の髪のおはなし)

:プリンス・エドワード島の自然と作品

永田 梓

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』(アンと緑色の髪のおはなし)

カナダの美しい島、プリンス・エドワード島にある小さな街アヴォンリーの「^{グリーンアイズ}緑の切妻」には今日もおてんば娘アンの明るい声がひびきます。アンは孤児院からちょっとした手違いをへてこの家にひきとられ、厳しくもやさしいマリラとおとなしいけれどアンのおしゃべりが大好きなマシュウの2人の老兄妹とくらしています。

想像力ゆたかで美しい自然や周りの人々を心から愛し、またみんなからも好かれているアンの悩みはもえるように真っ赤な髪。そんなアンのもとにある日の昼下がり、一人の行商人が訪れます。

その行商人はドイツ人で、必死に働いてお金を貯めて故郷の家族をカナダへ呼びたいと話します。

その熱い思いにアンは心を打たれ、自分も何か買って彼に協力したいと思った矢先、彼が広げた大きな箱のすみにあるびんに目が留まりました。それは保証つきの染め粉で、どんな髪も美しい黒髪に染まりけっして洗ってもおちないと書いてあったのです。アンは自分の真っ赤な髪が漆黒に染まり、美しく波打っているのを想像したとたんその染め粉にたまらなく魅力を感じてしまいました。

その染め粉は75セントもするものでしたが、その行商人は親切にもそれを50セントにまけてくれました。行商人がかえるとアンは早速古いヘアブラシに染め粉をつけ、真っ赤な長い髪を染めはじめました。

ところがおそろしいことに、ひとびん全部使ってしまったとき、アンの目にうつったのは思い描いていたぬばたまの夜のような美しい黒髪ではなく、奇妙な、つやのない青銅がかった緑色に少しもとの赤いのがまじった気味の悪い髪だったのです。

マリラは家にかえるとアンが言いつけどおりお茶のしたくをしていなかったのも、すっかり腹をたててしまいました。食事の時間になってもアンが居間にあらわれないので、ろうそ

くをとりにアンの部屋に行ったマリラはベッドの中にうずくまるアンを見つけて驚き、心配そうにたずねました。

「アン、眠っていたのかい？気分でもわるいのかね？」

「いいえ、でもどうかマリラ、あたしを見ないでちょうだい。いまあたしは絶望のどん底にいるんだもの。あたしの生涯は終わったわ。どうか、あたしを見ないでちょうだい」
アンは窒息したような声でそう言いました。

「いったいぜんたいどうしたというんだい。さあ、いますぐ起きてわけをはなしてしまいなさい」

ベッドから出たアンの髪を見たマリラは驚いて言いました。

「アン、髪をどうしたの？まあ、緑色じゃないか」

すっかり話を聞いたマリラはあきれて、見た目ばかり気にして見栄を張る心の結果がこういったできごとをまねいたのだと、アンにきびしく言って聞かせました。そしてその日から一週間の間アンはどこにも行かず、ひたすらせっけんで髪を洗いつづけました。しかし残念なことになんの効果もありませんでした。あの染め粉は、洗ってもおちないというところだけは真実だったのです。

そしていよいよアンはどうすることもできなくなり、マリラに髪を切ってもらうことにしました。とても辛いけれど、そうするよりほかになかったのです。マリラは徹底的にアンの髪を短く切りました。その結果はどんなにひいきめに見ても、似合うとはいえないものでした。アンは部屋の鏡を壁のほうに向け、激しく叫びました。

「髪がのびるまでは、二度と自分の姿を見ないわ！」

しかし突然鏡をもとに戻し、「いいえ、見るわ。部屋にくるたび自分のみにくさと向き合って、わるいことをした罪ほろぼしをするわ」と言いはなち、短くなってしまった髪をながめてため息をつきました。

次の日、とても短くなったアンの髪は学級中の話題をさらいましたが、誰もその原因を知ることはできませんでした。なぜなら親友のダイアナ以外、アンの染め粉事件を知る者はおらず、ダイアナはけっしてそのことを誰にも口外しなかったからです。しかしアンのライバルであるジョシー・パイだけは、アンがまるでかかしのような、と言うのを忘れませんでした。

プリンス・エドワード島の自然と作品

I. 作者と作品について

ルーシー・モード・モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery) は1874年にカナダのプリンス・エドワード島に生まれた。幼いころに母親と死別し祖父母に育てられ教師になったが、祖父が亡くなってからは愛する祖母を助けて郵便局で事務をとっていた。そして30歳のときにこの『赤毛のアン (原題: Anne of Green Gables)』を書いたが、三軒の出版社へ持ちまわっても相手にされなかったので出版を断念したため、その原稿は屋根裏部屋のトランクに放り込まれていた。

それから三年後、モンゴメリはとあるパーティに招かれたので、その衣装につけるリボンを探しに屋根裏部屋へあがりトランクを開けたとたん、すっかり忘れていた『赤毛のアン』の原稿が目に入ったのである。その数日後、モンゴメリは自分の旧稿にふたたび眼を通すと、おもしろくなって日が暮れてもランプをともし読み続けた。

アンにもう一度日の目を見るチャンスを与えてあげたい—そう思ったモンゴメリは、その原稿をボストンの出版社へと小包にして送った。その出版社は、『赤毛のアン』を500ドルで買い取りにしてくれたのである。するとこの作品はたちまち100万部以上も売れ、やがて無声版とトーキー版と二度も映画化されるにいたった。

以後この愛すべき作品は多くの言語に翻訳され、世界中の大人から子供まで多くの人々に親しまれている。

II. プリンス・エドワード島

プリンス・エドワード島はカナダ東部に位置する島で、この島を中心にカナダ国内でもっとも小さな州を形成している。南岸は農業がさかんで、北岸にはプリンス・エドワード国立公園があり夏季には多数の避暑客や海水浴客でにぎわう。またこの小説に登場する「輝く湖水」や「お化けの森」は実際にこの島に存在し、『赤毛のアン』の愛読者だけでなく毎年多くの観光客が訪れる。

III. モンゴメリとアン

主人公であるアン・シャーリーは幼いころに両親を病で亡くし、親戚の家や孤児院で幼少時代を過ごしている。しかし明朗快活な性格で、楽しいおしゃべりや美しい歌声で周りにいる人々を笑顔にするようなおてんばな女の子である。マシュウとマリラに引き取られてからもたくさんの騒ぎをおこすが、そのたびに少しずつ成長し大人になっていく。生まれ持った負けず嫌いの性格もあってか、学問に関しても特に優れており学校で優秀な成績をおさめ教師の道を選ぶことになる。

このアン・シャーリーは作者のモンゴメリ自身に通ずるところがあるといわれ、したがってこの小説はモンゴメリの自伝的要素が比較的強いものとも考えられる。

またモンゴメリの死後、国立公園の入口に記念碑がつけられたのだがその除幕式においては、小さく交通がとて不便な島ながらも非常に多くの人々が訪れたという。モンゴメリと彼女の作品は今でもなお人々の心に、色褪せることのない乙女の青春をもたらしつつづけている。

(ながた・あずさ：欧米言語文化講座 英語圏)

コナン・ドイル「ボスコム溪谷の惨劇」

:シャーロック・ホームズの世界

井倉 由加里

アーサー・コナン・ドイル「ボスコム溪谷の惨劇」

ある朝、私が朝食を取っていた時、メイドが電報を持ってきた。

【二日空いていないか。ボスコム池の惨劇事件で、西部イングランドより依頼を受けた。同行してもらえるとありがたい。パディントンに11:15分に発つ予定だ。】

旅行の準備を手早く済ませた私は、少し早めに駅に着いた。すでにシャーロック・ホームズがホームを行ったりきたりしていた。

「君が来てくれて本当にありがたいよ、ワトソン君」彼は言った。

切符を買って列車に乗り込むと、ホームズは買い込んだ大量の新聞を読み出した。

「君はこの事件について何か知っているか？」

「いや、何も知らないよ。最近は何も読んでいなかったからな。」

「この事件は非常に難しく簡単な事件だよ、ワトソン君。警察は被害者の息子が犯人だと断定している。」

「それでは、殺人事件なのか？」

「そう推測されているようだ。今分かっている範囲でこの事件の概況を簡単に説明しよう。」

ホームズは事件について語りだした。ジョン・ターナー氏とチャールズ・マッカーシー氏はオーストラリアから帰郷し、近くに居を構えた。ターナーはこの地方で一番の地主で、マッカーシーに農園を貸していた。ターナーには娘が一人、マッカーシーには息子が一人いて、共に妻に先立たれている。家族に関する情報はこれだけだった。

事件は先週の月曜日に起こったらしい。その事件というのは、マッカーシーがボスコム池付近で殺害されたというものだった。マッカーシーは3時に約束があると言って出て行ったきり、帰らぬ人となった。何故息子が容疑をかけられているのかというと、2人の目撃者がボスコム池に向かうマッカーシーの後ろを、息子が猟銃を持ってつけていたと証言したらしい。そしてもう1人の目撃者の14歳の少女が、池のあたりで殴り合いが起ころうな口論をしていたと証言した。息子がマッカーシーに手を上げたのを見て、怖くなって家に逃げ帰り、母にそのことを話していたところ、息子が助けを求めてやってきた。その息子の袖口と手には真新しい血のあとがあった。父の死体は池近くの草の上に横たわっており、頭部は重たい鈍器で殴られたような痕があった。息子の猟銃が近くに転がっていたため、それで殴られたと思われても仕方がない状況だ。息子はすぐに逮捕され、故殺と判断された。息子は父が「クイー！」と叫んだため、父の元に駆けつけたところ口論となった。息子が帰ろうと思

い少し歩いたところで、後ろから恐ろしい悲鳴が聞こえたらしい。

父の元に駆けつけると、父は死ぬ間際にネズミがどうか咬いていたと証言していて、無実を主張している。この事件に関して現在分かっていることはこれだけのようだ。

「被告人はとても不利な状況だな。この事件で君の出る幕はなさそうだよ、ホームズ」

「明確な事実ほど当てにならないものはないんだよ、ワトソン君。この事件で一つ二つ調べてみたいことがある。それは十分調べる価値のある問題だ。」

事件が起こった小さな田舎町に着いたのは午後4時のことだった。プラットホームで我々を待っていたレストレード警部が、被告人である息子と面会させるためにホームズを連れて行った。その夜、ホームズが帰ってきたのは遅かった。マッカーシー青年からは何も聞き出せなかったらしく、その日は事件についてそれ以上何も語ることはなかった。

翌日、我々はレストレードと共に事件現場へ足を運んだ。ホームズは手がかりを追い求めて、時に動き回り時にじっと立ち止まったりしていた。そこにいつもの静かな思考家のイメージは見られないほど、真剣に事件現場の周りを搜索していた。やがてレストレードが正確な死体の位置を示した。そこには確かに、頭を殴られて倒れた男の跡が残されていた。

「ねじれた左の足跡がそこら中についている。そしてそこで葦の中に消えている。これはマッカーシー青年の足跡だな。2度歩き、1度思いきり走っている。彼の証言と一致するな。これはなんだ？四角い爪先だ。非常に珍しい靴だ。」

ぶつぶつと言いながら、しばらくホームズは辺りを搜索した。ブナの木の下で腹ばいになった彼はとがった石を苔の中から見つけた。そして入念に木の近くを調べ、私にはごみにしか見えないものを集めて、封筒にしまった。

「これはとても興味深い事件だ。ちょっと手紙を書こう。そして昼食に戻ろうか」普段の態度に戻ったホームズは言った。

馬車の中でもまだホームズは拾った石を持っていた。

「レストレード、これに興味があるようだ。これが殺人の凶器だよ。この石があった下の草が育っていた。埋まっていた形跡も見当たらなかった。マッカーシー青年の凶器が使われた痕跡もなかった。この石は傷と一致するだろう。」

「で、犯人は？」レストレードは言った。

「背の高い男だな。左利きで左足を引きずっていて、分厚い狩猟用ブーツを履いて、インドの葉巻をホルダーを使って吸う。他にも手がかりはあるが、これで十分だろう。」

私たちがホテルに帰って昼食を取ったあと、一人の男が私たちの部屋を訪れた。その男は引きずるような歩き方と、曲がった背中が印象的な男だった。

「どうぞおかけください。私の手紙は届きましたか？」ホームズは言った。

「ああ、届いたよ。不名誉を避けるため、私とここで会いたいと書いていたな。どうしてだ？」

「私はマッカーシーの事件について、すべて分かっています、ジョン・ターナーさん」

その男は絶望的なまなざしをホームズに向けながら、やがてしばらくして「許してくれ！」と叫んだ。

「私は当局の者ではありませんので、あなたを逮捕するつもりはない。しかし、マッカーシー青年は釈放されなければならない。」

ホームズは事件について語りだした。

「マッカーシー青年の話によると、彼の父親は『クーイー！』と叫んだり、死に際にネズミに関する言葉をつぶやいたそうですね。それを真実だと仮定して、調査を開始しました。まず、『クーイー！』という言葉ですが、父親が会う約束をしていた人物に聞かせるために発した言葉です。これはオーストラリア人に特有のかけ声で、オーストラリア人同士で使われます。そこで、彼が会う約束をしていた人物は、オーストラリア人であることが推測できます。次にネズミに関する言葉ですが、これはマッカーシー青年の聞き間違いです。ア・ラット（ネズミ）ではなく、父親は‘バララット’と聞いたかったのです。つまりこの2つの話を総合すると、バララットから来たオーストラリア人ということになりますね。この近くに住んでいる人々で、その条件にあてはまるのはあなたしかいません。」

ホームズはそう話し終えたあと、ターナーの言葉を待った。

「私はオーストラリアではバララット・ギャングと呼ばれ、とても荒れた生活を送っていた。ある日、バララットからメルボルンに向かう金を積んだ馬車を襲撃した。そこで、私が銃をつきつけた相手がマッカーシーだった。私は金持ちになり、イギリスに戻った。結婚もして、子供も出来た。しかし、リージェント街でマッカーシーに会ってしまった。彼は私を脅し、私は彼に一番いい農場を無料で貸した。マッカーシーは結婚し、息子も生まれた。私は彼がほしがるものは全て与えた。娘のアリスを要求するまではな。奴は息子にアリスと結婚しろとしきりに言っていた。息子の方は、結婚は出来ないと言い張っており、よく口論になっていたようだが。私が奴を殺す直前も、そのことで口論していた。奴は私が病気で先が長くないのを知っている。だから息子を、私の遺産を受け継ぐアリスと結婚させたかったんだ。私はそのことで話があると、マッカーシーを呼び出した。私が行ったとき、奴は息子と話していた。葉巻を吸って、彼が一人になるのを待った。そして一人になったことを確認して、私は奴を石で殴って殺した。」

ターナーが自白したあと、ホームズは彼が余命あとわずかなことを知り、このことを我々の心にしまっておくことにした。マッカーシー青年は、ホームズが探し出した証拠により、無事釈放された。

このあと、ターナーは7ヶ月生きながらえたが、今ではもう亡くなっている。マッカーシーの息子と、ターナーの娘は結婚し、幸せに暮らしているようだ。真実を知っているのは世界でホームズと私だけになった。しかし、我々は今後一生、この事件について口を割ることはなさそうだ。

シャーロック・ホームズの世界

I. アーサー・コナン・ドイルと『シャーロック・ホームズ』

アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) ほかの有名な『シャーロック・ホームズ』シリーズの生みの親である。コナン・ドイルやシャーロック・ホームズといえば、一度は耳にした名前ではないだろうか。現代推理小説の生みの親とも言われる彼は、『シャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes)』シリーズで、最高の名探偵を生み出した。そして同時に彼の最高の相方である、ワトソンをも生み出している。ワトソンに関しては、作品中で医者ということが記述されている。これは若い頃に医学を学んだことのある、ドイルだからこそ生み出せたキャラクターであるといえよう。ワトソンは医学的知識でホームズを時に手助けする。それ故に、この作品中では最高のコンビとして、この2人が活躍している。

II. 『シャーロック・ホームズ』シリーズに登場するキャラクター

先ほど述べた、ホームズとワトソン以外にも、もちろんたくさんキャラクターがこの作品には登場する。例えば、悪役で有名なモリアーティ教授。彼は悪役でありながらも、ホームズファンの中では人気がある。それはこのモリアーティ教授がいるからこそ、シャーロック・ホームズが生きてくるように思えるからである。モリアーティ教授といえば、シャーロック・ホームズと肩を並べるほどの頭脳明晰ぶりである。そんな彼がロンドンの犯罪社会のバックにいる状況で、ホームズはそのロンドンの闇と戦うことになる。モリアーティ教授がいなければ、ホームズが頭を抱えるほどの事件は起こりえない。私はそう思っている。この教授との戦いが「最後の事件」(“The Final Problem,” 1893) という短篇小説の中で描かれている。この事件については、私がここで解説するよりも、この小説を実際手に取っていただいて、読んでいただくのが一番だと思う。

III. この作品を選んだ理由

ホームズ・シリーズには、シャーロキアンと呼ばれる、熱狂的なファンが存在する。私もそこまではいかないが、ホームズ・シリーズはとても好きな作品の一つである。推理小説が好きで、中学生のときに始めてホームズ・シリーズを読んだ私は、すぐにこの作品のファンになった。ホームズの鋭い洞察力と観察力。いつも冷静で理知的なホームズが、事件になると普通の人間らしくなること。この「ボスコム渓谷の惨劇」(“The Boscombe Valley Mystery,” 1891) という短篇小説の中で、ホームズは色々な一面を見せてくれる。もちろん、鋭い観察力や洞察力もだが、事件現場を調べているときのホームズはどこか興奮していて、そこに少し親しみがわくファンは、私だけではないように思える。そして、警察にターナーの自白を知らせないなど、優しい一面もこの作品の中でを見せてくれる。ホームズはその冷静さや推理力が魅力だが、それだけでは熱狂的なファンは生まれないと思う。それだけでは少し機械的な人間だと思ってしまうからだ。そこに彼の人間らしさというものが加わって、初めて最高の名探偵シャーロック・ホームズが生まれるのだと、私は思う。

(いくら・ゆかり：欧米言語文化講座 英語圏)

オー・ヘンリー「最後の一葉」

:オー・ヘンリーの魅力

松原香織

オー・ヘンリー「最後の一葉」

ワシントンスクエア西には芸術家たちが集まる小さな地区がありました。入り組んだ道路があり、「プレイス」と呼ばれる区域に小さく分かれていました。芸術家たちは、北向きの窓と18世紀の切妻造、そしてオランダ風の屋根裏部屋を探して、ここに住みつき始めたのです。

レンガ造りの三階建ての最上階にはスーとジョンジーの二人の女流画家のアトリエがありました。ある定食屋で出会った二人は、お互いの趣味が合って意気投合し、共同でアトリエを持つことにしたのです。

11月ごろから、プレイスの通りには、よそ者がうろつくようになりました。医者からは「肺炎」と呼ばれる、そのよそ者は氷のような冷たい指で人々に触れて回るのです。東からやってきたよそ者は、多くの犠牲者を出してきました。彼は騎士道精神なんて持ち合わせていません。だれかれかまわず、たとえ小柄な婦人だとしても、襲いかかります。ジョンジーだって例外ではありませんでした。冷たい指に触れられたジョンジーは倒れ、ベッドに横になったまま動けなくなりました。動けないジョンジーができることはたった一つ、窓ガラス越しに隣の家の煉瓦の壁を見続けることだけでした。

医者がジョンジーを診察に来たある朝、スーは医者に廊下に呼び出されました。

「助かる見込みは・・・そうだな、十に一つ。」体温計を振って水銀を下げながら、医者は言いました。「まあ、それもあの子が『生きたい』って思っていたら、の話だ。それが感じられん。自分でよくならない、と決めつけているんだからな。そりゃ効く薬も効きやせん。あの子が何か気にかけているようなことはあるかい？」

「あの子は・・・いつかナポリ湾を描きたい、って、そう言ってました。」

「絵を描きたい、とな？他にもっと実のあることはないのか？・・・まあ、だったら、それがポイントなんじゃろうな。わしもできる限りのことはする。あの子に、この冬どんなコートの袖が流行るのか、なんて尋ねさせることができれば、助かる見込みも五に一つになるんだがね。」

医者が帰った後、スーは思いっきり泣きました。泣きやんだあとは、口笛を吹きながら、ジョンジーの部屋に入って行きました。

ジョンジーが何か低い声で呟いているのが聞こえました。窓の外を見ながら、「じゅうに・・・

じゅういち、じゅう、く・・・はち、なな・・・」と逆に数を数えていたのです。

スーは何を数えているのだろうと窓の外を見ました。そこにあるのはただの崩れかけた壁だけで、古いツタは煉瓦に這うようにまきついています。

「ろく」

スーは何を数えているのか尋ねました。

「葉っぱよ。三日前は100枚くらいあったのに、今はたった6枚になったわ。あ、また散ったから5枚ね。あれが最後の一枚になって、そして全部散ったとき、私も死ぬのよ。」

「何を言っているの？あなたが元気になるとツタの葉っぱは関係ないわよ。」

「ほら、また一枚散ったわ。」

「やめて、もう窓の外なんて見ないでよ。」

「せめて最後の一枚が散るのを見たいの。もう待つのも考えるのも疲れちゃったから。自分が持っていたもの、すべて放してしまいたいわ。そしてひらひらっと飛んでいくの、あの疲れた木の葉みたいに。」

「もうおやすみなさい。わたしはベアマンさんのところにモデルを頼みに行ってくるわ。すぐに戻るからね。」

ベアマンさんは下の階に住んでいる画家でした。六十は越していますが、彼は芸術家としては失敗した人生でした。ここ数年はときどき広告に使う絵を描くくらいで、あとはプロのモデルを雇えない芸術家のためにモデルをして収入を得ていました。お酒を飲んで、これから描く傑作について語り、軟弱な奴を嘲笑う、気難しい人でした。

スーはジョンジーの妄想をベアマンさんに話しました。

ベアマンさんは赤い眼をうるませつつ、ばかばかしい想像だ、と軽蔑と嘲笑の笑い声をあげました。

「なんだって、けしからん！葉っぱが散るから死ぬなんて！そんなこと聞いたことねえぞ！くだらんこと言ってるようじゃ、モデルなんて頼まれてやらん！」

「ジョンジーも熱で弱ってて、おかしい考えで頭がいっぱいなよ。・・・いいえ、いいわ、ベアマンさん。モデルなんてしてくださらなくて結構。でも！あなたは老いぼれの・・・老いぼれのコンコンチキよ！」

「いんや、モデルもやってやるさ。あんたと一緒に行くんだ。ここはジョンジーさんみたいな素敵な娘さんが病気で寝込んでるようなとこじゃねえんだ！いつかわしは傑作を描いて、ここを出てってやるんだからな！」

上の階に戻るとジョンジーは寝ていました。窓の外にははっきりなしにみぞれまじりの雨が降り続いていました。

次の朝、ジョンジーは日よけを上げるようにスーに言いました。

スーはしぶしぶ従いました。

しかし、激しい雨と風が一晩中続いたというのに、煉瓦の壁にツタの葉が一枚残っていま

した。最後の一枚がそこにありました。

「これが最後の一枚なのね。ゆうべのうちに散らと思ってたのに。でも今日あの葉っぱも散って、私も死ぬのね。」

昼になり、黄昏時になっても最後の一枚は壁にしがみついていた。夜がきて北風が吹き、雨は窓を激しく打ちました。

また、朝が来ました。ジョンジーはまた日よけを上げるように言いました。

ツタの葉はまだそこにありました。

ジョンジーは長い間その葉を見ていました。そしてジョンジーを呼びました。「私、悪い子だった。何かがああ最後の葉を散らないようにして、私がどんなに悪いことを考えていたのか教えてくれたんだわ。死にたいと願うのは、罪なのね。」

それからスープを飲んで少し元気になったジョンジーはこう言いました。「スー。わたし、いつか、ナポリ湾を描きたいわ。」

午後に医者がやってきてこう言いました。「五分五分だ」と。「よく看病してやりなさい、そしたら大丈夫だ。これからわしは下の階の患者も診に行かなきゃならん。ベアマンといたな。彼も肺炎なんだ。もう体も弱ってて、年だし、助からんだろうがな。」

次の日医者は言いました。「もう完全に大丈夫だ。あと必要なのは栄養と看病だけだ。」

その午後、スーはベッドのところにきて言いました。「話したいことがあるの、ジョンジー。今日、ベアマンさんが肺炎のためお亡くなりになったの。罹っていたのは二日だけだったみたい。一日目の朝、ずぶぬれになっているのを管理人さんに見つけられたの。ひどい雨と風の晩にどこに行っていたのか、最初は分からなかった。でも、引きずり出されたはしごと、散らばっていた筆、そして緑と黄色が混ぜられたパレットが見つかったの。ねえ、窓の外見てごらんなさいよ。どうして風が吹いてもひらひら動かないのか、不思議じゃない？あれがベアマンさんの傑作なのよ。・・・あの葉は、ベアマンさんが書いたものなの。最後の一枚が散った夜に。」

オー・ヘンリーの魅力

I. オー・ヘンリーの生涯

オー・ヘンリー (O. Henry) は1862年9月11日アメリカのノースカロライナ州に生まれた。オー・ヘンリーというのはペンネームで、本名をウィリアム・シドニー・ポーター (William Sydney Porter) という。医者をして父親に持つが、母親は3歳のときに亡くなった。教育者の叔母により育てられた。読書を好んでいたが、学業は15歳の時にやめた。

1882年に知人の勧めでテキサスに移り住んだ。そこでは薬剤師やジャーナリスト、銀行の出納係など、さまざまな職を転々とした。1887年にはアトエール・エステスと結婚した。1894年に*The Rolling Stones*という風刺週刊誌を発行したが、うまくいかずすぐに廃刊となった。

1866年、以前働いていたオハイオ銀行の金を横領したという疑いで起訴され、懲役5年の有罪判決を受けた。服役中から密かに作品を書き、新聞社や雑誌社に作品を送り続けた。出所後は新聞の経営と編集を行い、そして作家としての活動を始めた。

1910年に、過度の飲酒を原因とする肝硬変にかかり、生涯を閉じた。

II. オー・ヘンリーの作品

彼は、10年間ほどで約280篇もの短篇小説を書いた。それらは、ユーモアとウィットとペーソスに富み、プロットが非常に巧みであった。

2、3ページの短い作品であっても、その中には起承転結がしっかりとあるのがオー・ヘンリーの特徴だという。すぐに読者を物語の中に引き込んでしまう。そして、最後には、思いもよらない「どんでんがえし」が待っている。さりげない話の筋から繰り出されるため、「オチ」が不快なものにならない。また、その展開によって、読者を驚かせるが、それだけではない。温かい気持ちや、切ない気持ち、さまざまな感情を与えてくれる。

ここで紹介した「最後の一葉」(“The Last Leaf”)では、どうだろうか。酒飲みで嫌味なやっかいな老人でしかなかったベアマンさんが、最後に残した「傑作」が、ジョンジーに「生への執着」を与え、再び絵を描こうという気持ちにさせた。人の気持ちを動かすという、まさに「傑作」をレンガに描きだしたベアマンさん、彼に対する気持ちを読者は物語の最後で変えるだろう。読後には、切ないような気持ちがありながら、それでも、明日への生きる希望というものが湧いてこないだろうか。

短い物語の中でも、天才的なプロットによって、読者を引き込み、「何か」を与えてくれるオー・ヘンリーの作品は、現代の私たちの生活の中で必要なものを思い出させてくれるのだと思う。

III. リトールドを終えて

短篇小説をリトールドするというのは、思ったよりも難しいことであった。上にも書いたように、プロットが素晴らしいオー・ヘンリーの作品のどこを削り、どこを残すのかを決める作業で非常に頭を悩ませた。彼が大切に思っていた「筋」はどこなのか。この一文を削ることによって、最後のどんでん返しでの読者の気持ちに、足りないものが出てくるのではないだろうか。たとえば、ベアマンさんの言葉ひとつひとつにも、それがどのような印象になるのか、それがオチの部分で最も良い効果を与えるにはどうすればいいだろうか。そのようなことを考えながらリトールドを進めていった。

また、ジョンジーの病からの苦しみ、スーの必死に友を思う気持ちを大切にしながらリトールドしたいと思った。若くして「生」をあきらめるような状態になってしまったジョンジーの悲しみに触れて、とても痛々しい気持ちになった。それを必死に看病するスーも、ここまで友のことを大事に思える彼女は素晴らしいと感じた。

あらためてこの作品を読み、深く考えることによって、「ときに挫けることがあっても、周りの人の応援があれば夢を追うことはできる」そのように思われた。私も、だれかにとっての希望となる「葉」になれば、そう思った。

(まつばら・かおり：欧米言語文化講座 英語圏)

オー・ヘンリー「最後の一葉」

:近代のニューヨークと文学

塩谷彰久

オー・ヘンリー「最後の一葉」

ワシントン広場の西の狭い区域では、いくつもの通りが乱雑にのびており、プレースと呼ばれる細長い土地に細かく区切られている。芸術作家のスーとジョンジーはそこにずんぐりした三階建てのれんが造りのてっぺんに、アトリエを持った。八丁目の食堂で出会った二人は、趣味がぴったりと合っていたことから、ふたりの共同のアトリエが生まれたのである。

それは五月のことであった。そして十一月になると肺炎が村に入ってきた。運悪くジョンジーはその肺炎にかかってしまったのである。医者によると、肺炎が治る見込みはほとんどないとのことだった。またジョンジーが自分で治らないものだと決めつけていることも原因の一つであった。それを知ったスーは、なんとかジョンジーを元気づけようと絵を描き、それを売ったお金でワインを買おうとした。ジョンジーの横で絵を描いていると、何かを数える低い声が聞こえた。窓から見えるツタのつるについた葉が落ちていくのを見て、その残りの数を数えていたのである。なぜそんなものを数えているのかをスーはジョンジーに尋ねた。

「最後一枚が落ちる時には、私も行かなくちゃいけないんだわ」とジョンジーは答えた。スーはとても驚いた。ジョンジーの生きたという思いはほとんど無くなってしまっていたのであった。それでも彼女を元気にしたいと思うスーは気丈にふるまい、また絵を描くからと言ってジョンジーに目をつむっておくように頼んだ。

その間にスーは絵のモデルに、同じマンションの下の階に住むベアマンという老人を呼んできた。ベアマンも絵描きである。彼は四十年間傑作を書くと言い続けてきたが、手をつけることもしない絵描きであった。スーはそんなベアマンにジョンジーのことについて相談したのであった。ベアマンは、涙の浮かんだ赤い目をして、大声でジョンジーのばかげた空想をあざけり罵った。そして、モデルになることを了解した。

スーが絵を描いている間、外では、雪交じりのつめたい雨が、ひっきりなしに降っていた。翌朝、ジョンジーは窓の外を見たいといった。スーはしぶしぶ緑色のシェードをあげた。ところがどうだろう！叩きつけるような雨と吹きすさぶ風とが、長い夜じゅう続いていたというのに、煉瓦の上には、やっぱりツタの葉が一枚へばりついているではないか。「最後のひと葉だわ」と、ジョンジーが言った。次の日の夜も北風が吹き、雨は相変わらず窓をたたいて降っていた。しかしツタの葉はまだそこにあった。その葉の姿に勇気づけられたスーの具合はどんどん良くなっていった。そして彼女は危機を脱したのであった。しかし二日前から肺炎にかかっていたベアマンが亡くなってしまったのである。実はツタの最後のひと葉は、雨が降りしきる中、ベアマンが壁に描いたものであった。その最後の葉は、ベアマンの傑作となった。

近代のニューヨークと文学

I. 作家と作品について

オー・ヘンリーは、本名ウィリアム・シドニー・ポーター (William Sydney Porter) である。アメリカ文学史に特異の地位を占めている短篇作家であり、約280編ほどの作品を残している。長編の作品は一つもない。1862年9月11日、アメリカのノースカロライナ州グリーンズボロで、医師アルジャーノン＝シドニーの息子として生まれた。薬剤師、ジャーナリスト、銀行の出納係など様々な職を転々としていた。1986年には、働いていたオハイオ銀行の金を横領した疑いで起訴され、1898年に懲役5年の有罪判決を受けている。服役前から小説を書き始めており、1899年に『マクレアズ』誌に第一作が出された。1910年、過労と主に過度の飲酒を原因とする肝硬変により、病院で四十七年の生涯に幕をとじた。彼の作品の特徴として、南部のニューオーリンズや、西部のテキサスや、遠く中米などを舞台にした作品もかなり多いが、ニューヨーク市を背景にして、そこに住む庶民の生活に材をとったものが圧倒的に多い。

次に今回紹介する作品「最後の葉」(“The Last Leaf”)はヘンリーの代表作である。舞台は先ほど出てきたようにニューヨークであり、成功を夢見る二人の女性とひとりの老人の物語である。この物語は人間の命の尊さ、生きることの喜び、人間のあたたかさを知ることができる作品となっている。

II. 当時のニューヨークとグリニッジ・ヴィレッジ

時代設定はおそらくヘンリーの生きていた時代19世紀後半から20世紀前半であろう。今でこそ人口約830万人を抱える世界有数の大都市となっているニューヨークも、もともとはオランダ人によって交易場として築かれた町であった。近代資本主義の勃興期、ニューヨークにもようやくサラリーマンと呼ばれる人たちの小市民的生活が根をおろしはじめた。そんなわけでニューヨークはまだまだ発展途上の地であったのだ。その中でも作品の舞台となっているグリニッジ・ヴィレッジはニューヨークの中心地に位置しながら、いくつもの通りが乱雑に入り組んでいて、プレースと呼ばれる小路に寸断されている。それゆえにニューヨークの発展の波に乗り遅れてしまった。しかしながら、そうであったために、1910年代に入ってもグリニッジ・ヴィレッジはアメリカの思想的、文化的な拠点となっていくのであった。というのも発展がおくれたゆえに、この地域ではきわめて安くアパートを借りることができ、手ごろな値段のカフェやレストランがいたるところに点在していた。そのために、無名で貧乏ではあるが、才能豊かな芸術家たちや思想家たちが全国から押し寄せてきて住み着くことになったのだ。この物語の主人公、スーとジョンジーも別の州からやってきた。ここに住む多くの人々は売れてここを出ていきたいと思っていた。一方では、グリニッジ・ヴィレッジは夢見る人が夢見ようとしたがために痛い目にあい、それから逃れるためにやってくる避難所でもあったのだ。避難所には、これから頑張ろうとするものと、夢見ることに疲れて一休みしにきたものが混在している。そんな彼らあたたかく受け入れてくれるカフェやレストランがここにはあるのだ。そんな人情味あるこの場所が、芸術家にとって居心地のいいところだったかもしれない。そんな素朴な表情を持つグリニッジ・ヴィレッジと庶民が主人公となっているこの作品がうまくマッチしていたのではないかと思う。そして、庶民の日常生活を題材とすることが多いヘンリーにとっては、まさにうってつけの場所であったに違いない。

III. ヘンリーの作品の特徴

彼の作品を数多く翻訳している大久保康雄氏はこう述べている。「彼の作品の特徴は、ユーモアと

ペーソス（哀感）とウィット（機知、気転）、そしてプロット（筋書き）の巧みさであろう。特にプロットの構成の巧みなことでは、世界の文学史でもちょっと類がないほどで、たいていどの作品にも落語などといういわゆる〈落ち〉がついている。読者を笑いとサスペンスにつつまだま、巧妙な話術でぐんぐん引きずって行って、最後にあっと言わせるという趣向である」と。

私自身もこの作品を読んで、最後にはそうだったのかという驚きと満足感のようなものを感じることができた。最後のどんでん返しというか意外な結末は、私に嫌な感じを残させるものではなくて、何かすがすがしさのようなものを感じさせてくれた。それは、この作品に出てくる素朴で人情味あふれる登場人物がいきいきと自然な感じで描かれているからだと思う。またこれが多くの人に認められた理由の一つではないだろうか。また、ヘンリー自身が刑務所に入れられていたこの体験は、彼の人間を見る目をやしない、人間について深く考えられるようにしたはずである。その結果、彼の作品に出てくる登場人物は、人間的な部分がよくあらわれているのだと私は思う。

そしてもう一つ、この作品が短篇ということがすばらしいと思った。近頃は、忙しい、本を読むのが面倒だ、インターネットやテレビ、そしてゲームをやっているほうが楽しいという理由で若者の活字離れが進んでいる。ヘンリーは、笑い、悲しみ、どきどき、感動をコンパクトにまとめてくれている。そして、コンパクトであるのに味わい深い作品となっているのは、使われている表現や会話文が非常に巧みであるからである。それは彼が愛情を持って、庶民たちの生活を描き続けた成果であると思う。このような作品は我々にとって非常に読みやすいものであると私は考える。

以上のことから私は、本が苦手な人も短時間で十分楽しめる作品となっているこの作品をきっかけにもっと本に触れてもらいたいと思っている。私がこの本を選んだ理由は、私自身もヘンリーが短篇作家ということを知って、どのようにして短い文章で読者に感動や自分の伝えたいことを書いているのかを知りたくなったからである。そしてどのような作品があるのかを読んでいるときに、昔読んだことのあるものがあつた。それがこの「最後の葉」であつたのだ。そして、この本を読みなおし、ぜひ他の人にも読んでもらいたいと思い、リトールドする本に選んだ。

この本を読みなおして私は、日常に起こる人々の感情を忠実に再現しているように感じた。その感情というのは、ほんの些細な喜び、いきなり自分に突きつけられた不幸に対する悲しみや絶望感である。それを文章で表現していることにとっても驚いた。そしてヘンリーの作品というのは上述しているように「落ち」があるのである。その落ちというのがあつと驚くものであり、我々読者に強い印象を残してくれる。それゆえ、何年もたつてから読みなおしても、次々と内容を思い出すことができたのであろう。

またこの作品は小学生、中学生が読むようなものであるかもしれないが、ぜひ大人の方にも読んでいただきたいと思う。何度も言うようだがこの作品は、非常に短い作品となっている。にもかかわらず、あたたかさや悲しみなど、いろいろな主題をもっている。どこに主眼を置くかで感じることも違ってくる作品であるので、何度も何度も読み返して自分なりに解釈してみるのもいいのではないだろうか。

参考文献 大久保康雄訳『最後の葉：オー＝ヘンリー傑作短編集』

(しおたに・あきひさ：欧米言語文化講座 英語圏)

オー・ヘンリー「賢者の贈り物」

:長く愛される文学から感じる思いやりの心

富田 彩

オー・ヘンリー「賢者の贈り物」

デラとジムは貧しい生活を送っていましたが、お互いのことを本当に愛し合って暮らしていました。

この若い夫婦には誇るべきものが二つありました。一つはジムの先祖代々持っていた金時計。もう一つはデラの美しく長い褐色の髪。

しかし、ジムの金時計にはそれにふさわしい鎖がなく古い皮紐をつけていて、人前で時計を見るときたびたび恥ずかしい思いをしていました。また、デラは以前ブロードウェイで見つけた、純粋な鼈甲でできていて宝石で縁取りがしてある美しい櫛のセットが欲しくてたまらなかったが高価で買えませんでした。

クリスマスの前日。デラは愛する夫のために何かプレゼントをしようとその日までコツコツとお金を貯めてきました。しかし貯まったお金はたったの1ドル87セントだけでした。デラは声を上げて泣きました。長い間大切なジムのためにお金を貯めてきたのにたったこれだけなんて。すてきでめったにないプレゼントをあげようと思っているのにこれではなにも買うことができない！

すると突然デラは何か思いついたように立ち上がり、部屋の全身鏡の前に立って髪を下ろしました。その髪は本当に美しく膝のあたりまであり、まるで長い衣のようでした。デラはそれをしばらくじっと見つめて何かを迷っているようでした。そして再び髪をまとめると、ためらったようにじっとしていました。やがてデラの目からは涙がぼろぼろこぼれてきました。しかししばらくあとには、デラはドアの外に出ていました。目にはまだ涙を浮かべていましたが、何かを決心したようでした。

デラは“マダム・ソフロニー ヘア用品なら何でも”と書いてある看板のところまで来ると階段を駆け上りました。店の中には大柄で冷ややかな女主人がいました。

「髪を買ってくださいますか」

とデラは尋ねました。

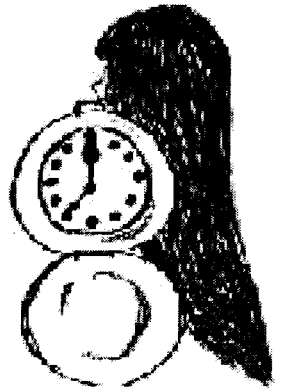
「買うさ」

と女主人が答えました。

デラが帽子を取って髪を下ろして見せると女主人は満足そうな笑みを浮かべて言いました。

「20ドル」

「すぐください」



とデラは言いました。

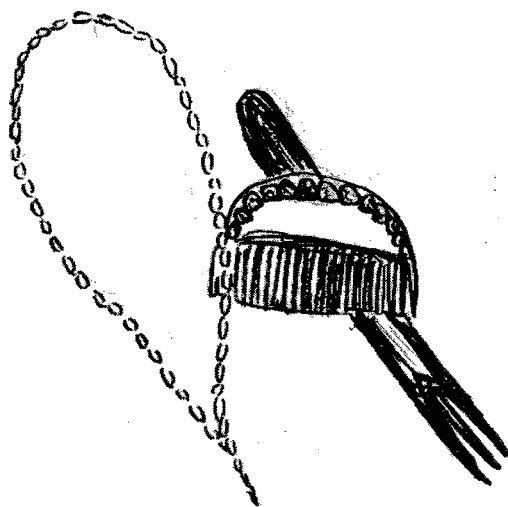
それから2時間後、髪がすっかり短くなったデラは21ドル87セントを持ってジムにぴったりの物を探し歩いていました。そしてとうとう見つけました。一目見てジムにプレゼントするのに最高だと分かりました。それはプラチナの時計鎖で、シンプルで上品なデザインで素材のみがその価値を主張していて、ジムの時計につけるにふさわしい立派なものでした。寡黙だが価値がある—この鎖はジムに似ているところまで感じられました。鎖は21ドルでした。

最高の買い物をして家に帰り興奮が醒めてくると、愛に気前の良さを加えて生じた被害のダメージを感じずにいられませんでした。ヘアアイロンでなんとか修復しようとしたもののやはり不恰好になってしまいます。デラの頭の中は「ジムは今のわたしのこともかわいいと思ってくれるかしら」という心配でいっぱい、神様に祈ったりしていました。

そしてジムが部屋に入ってきました。ジムは最初デラを見たときなんだか奇妙なものでも見たような不思議な表情のままぼうっと立ち尽くしていました。デラが髪を切って売ってジムの素敵なクリスマスプレゼントを買ったことを説明しても、デラがそれでもわたしのことを愛してくれるわよね？と尋ねても、すぐには状況が飲み込めないようでした。しかししばらくして突然ジムはデラのことを抱きしめ、ある物を投げ出しました。「僕が髪型なんかで僕のかわいい女の子を嫌いになったりするもんか」

という愛の言葉とともに投げ出された包みの中身を見て、デラは歓喜の叫びを上げ、次にそれはヒステリックな涙と嘆きに変わっていきました。ジムがデラに用意したプレゼントは、ブロードウェイであがめんばかりに欲しいと思っていたあの櫛でした。手に入ったなんて奇跡です。しかし、その櫛に飾られるべき肝心の長い髪が今はもうないのでした。しかしデラは微笑んでこう言いました。

「私の髪はね、とっても早く伸びるのよ！」そしてデラは思いをこめてジムにとっておきのプレゼントを差し出しました。プラチナの鎖は手のひらでキラキラと輝いていました。ジムはこれを見て椅子に腰を下ろし、微笑みました。「ねえデラ。僕たちのクリスマスプレゼントは、しばらくの間どこかにしまっておくことにしようよ。いますぐ使うには上等すぎるよ。櫛を買うお金を作るために僕は時計を売っちゃったのさ」



東方の賢者はご存知のように賢い人たちでした。この二人は家の最も素晴らしく最も誇れる宝物をお互いのために台無しにしてしまいました。愚かだと言われるかもしれませんが。しかし贈り物をやりとりする全ての人の中で、この二人のような人たちこそ最も賢明なのです。彼らこそ、本当の東方の賢者なのです。

長く愛される文学から感じる思いやりの心

I. 作家と作品について

オー・ヘンリー (O. Henry) は本名をウィリアム・シドニー・ポーター (William Sydney Porter, 1862.9.11~1910.6.5) という。アメリカの小説家で、主に掌編小説、短編小説を得意とし、381編の作品を残した。市民の哀歓を描き出した作品が多く欧米ではサキと並んで短編の名手と呼ばれている。

オー・ヘンリーの名を冠して、英語の優れた短編小説に与えられる賞にオー・ヘンリー賞というものがある。またテキサス州オースティンにオー・ヘンリー博物館がある。

「賢者の贈り物」(原題: The Gift of the Magi) はオー・ヘンリーの代表作といえる短編小説で、新約聖書にある東方の聖者がキリストの誕生を祝うため贈り物を持ってやって来たエピソードを下敷きとして贈り物をめぐる行き違いを描いている。

他の代表作としては、「最後の一片」「都会の敗北」「警官と讚美歌」「赤い酋長の身代金」などがある。

II. この作品が長く愛される理由

この作品が、たくさんの人に長く愛されている理由は、まずひとつに読後感がすごく良いからだ。私は考える。ほほえましい二人の若夫婦に心があたたかくなる。二人は失敗をしたが決して読者は悲観的になることがないのだ。この二人の行き違いは悲しいものではなく、むしろ前向きな、きわめて成功に近い失敗だった。相手を思いやる一途な誠実さに心洗われる思いがする。

そしてふたつめに、いつの時代にも変わらない愛とか信頼、絆をテーマとしているからだと思う。この二人の行動は一見非常に愚かしくも見える。しかしどれだけ互いを愛していたのかがよく分かるし、相手を思う気持ちが贈り物には何よりも大切なものなのだとすることを気づかされるのだ。目的は果たせなかったがきっと二人はますますお互いの愛を深め合うことができたと思う。プレゼントの有益性や金額の大小ではなく、思い入れの強さが喜びをいっそう引き立たせるものだと感じた。

III. この作品で作者が伝えたかったこと

この物語のタイトルに「賢者」とあるが、これはキリストの生誕を祝ってやってきた賢者たちを引き合いに出して、その賢人たちが選んだ贈り物と、この貧しい若い夫婦が選んだ愛のこもった贈り物の価値について作者が語り読者にも考えさせているからだと思う。さらに作者は愛のかたちについても読者に問いかけていると思う。

世の中には貧しくて壊れてしまったり成就しなかったりする愛もある。やはり愛だけでは生きていけない。しかしお金があればそれが解決されて愛のある生活を約束されるのかといえばそうではないはずだ。愛を表現する方法もさまざまで物も豊富な現代だからこそ、何よりも相手を思いやるという愛が必要なのではないだろうか。

参考：

賢者の贈り物 - 青空文庫

オー・ヘンリー - Wikipedia

東方の三博士 - Wikipedia

※イラスト - 自作

(とみた・あや：中学校教員教育養成課程 保健体育)

ヘミングウェイ『老人と海』

:偉大な作品との再会

大谷 恭子

アーネスト・ヘミングウェイ『老人と海』

舞台は南米・キューバ。年老いた漁師・サンチャゴはひとり小舟を浮かべ、魚をとる日々を過ごしていたが、一匹も釣れない日が84日も続いた。老人ははじめの40日ある少年と一緒に過ごしたのだが、少年の両親は老人が「サラオ（スペイン語で最悪の事態を意味する）になってしまったのだ」と言い、少年は両親の言いつけに従い、別の舟に乗り込むことになった。こうして老人は一人で漁に出ることになったのだ。

これまで老人は少年に漁の仕方を教えてきた。少年は老人を慕っていた。

「サンチャゴ、また一緒に行きたいなあ。金もいくらかたまつたもの」

「いけないよ。お前の乗り込んでいる舟には運がついている。仲間と一緒にいるこつたな」
老人は言った。

「でも、覚えているだろう！87日も不漁が続いた後で、僕たち、3週間ずっと毎日、大きなやつを何匹も釣ったことがあったじゃないか」

「覚えている。知ってるよ、お前が離れていったのは、おれの腕を疑ったからじゃない」
老人は言った。

「おとつあんだよ、いけないって言ったのは。僕は子供だ。言うことをきかなくちゃいけないんだ」

「わかってるよ」

少年は老人にビールをおごり、明日の漁のこと、少年の親方のことなどを話したあと、二人で小舟から道具を運んだ。少年は老人のことを本当によく慕っていたから、老人の世話をあれこれしていた。いつものように晩御飯をテラス軒の親父からもらい、老人の小屋に持ってきた。二人で夕食を食べ、野球の話をした。

「一番すばらしい監督は誰なの、ほんとは？ルク？マイク・ゴンザレス？」

「おんなじようなものだろう」

「それで、世界一の漁師はお爺さんだね」

「ちがう。おれはもっとうまいやつをいくらも知っている」

「ケ・バ（スペイン語＝とんでもない）。うまい漁師はたくさんいるよ、えらい漁師だつていくらいるよ、でも、お爺さんだけは特別だ」

「ありがとう。お前はおれをうれしがらせてくれる。まあ、このうちは、えらい魚が現われて、おれたちの考えをひっくりかえしてしまわないように祈るこつたな」

「そんな魚いるものか、お爺さんは昔のように強いんだもの」

「いや、おれは思っているほど強くないかもしれない。でも、いろいろ手は知っているし、それに肚ができていってものさ」

こんな話をしている間に、夜も更け、少年は「おやすみ、お爺さん」と言って、出て行っ

た。老人はすぐ眠りに落ち、夢を見た。アフリカの、砂浜のライオンの夢だ。ライオンは薄暮のなかで子猫のように戯れている。老人はその姿が好きだった、今あの少年を愛しているように。

朝になり、老人は少年を起こしにいった。二人は漁師たちの集まる朝の溜り場でコーヒーを飲んだ。老人がコーヒーを飲み終えたら、二人は小舟のほうへ向かった。それから小舟を持ち上げて水のなかへ押し出した。

「うまくいくように、お爺さん」

「お前もな」老人はそう言って大海目指して漕ぎ出して行った。

こうして85日目の漁が始まった。老人は「今日こそ釣ってやる」という意気込みでいた。遠くに浮かぶ舟や太陽を見ているときだった。軍艦鳥が彼のほのか上空を飛んでいるのが目に入った。

「やつ、なにか見つけやがったな」老人は大声を上げて言った、「あれは、ただ探しているだけの格好じゃない」

鳥のいるあたりに向かって漕ぎ出した。少しも急がない。ただ、獲物は間違いなく手に入れたかった。すると突然、鳥はまっしぐらに舞い降りてきた。

「シイラがいるんだ」老人は大声をあげた、「でかいシイラだ」

しかし逃げられてしまった。そのうちもっと大物が現われるだろうと、老人は思った。魚は餌に食いつくのだがなかなか釣れず、「あの子がいてくれたらなあ」と何度思ったことだろう。

やっとのことで待ちに待った大物がかかった。老人は決して急がず、「死ぬまで付き合っ
てやるぞ」と魚に話しかけながら3日間闘った。しかし、せつかく捕まえた獲物は、鮫に食いちぎられてしまった。

「半分しかない」と老人は声に出して言った、「お前はもう半分になっちまった。遠出したのが悪かったんだ。おれは、おれとお前と、二人とも台無しにしてしまった。けれどな、おれたちは鮫をたくさん殺したじゃないか、お前とおれとでさ。そのほかにもずいぶんひどいめにあわせてやったじゃないか。そうだ、お前、今までに何匹やったね？そのとがったくちばしは、だてにつけてるんじゃないからな」

その後も何度も鮫に襲われながら港にたどり着いた。真っ暗で、みんな寝てしまっていた。疲れきった老人は、小屋に着くまでに5度も腰を下ろして休まなければならなかった。小屋に着いた老人は、ベッドに横になり、眠りに落ちた。

朝、少年がいつものように老人の小屋にやってきた。少年は老人の寝息に耳を傾け、その両手を見、声を立てて泣き始めた。それからコーヒーをとりそと小屋を出て行ったが、少年は泣きつづけた。

漁師たちが小屋に集まって、横にくくりつけられた異様な物体を見ていた。漁師たちはその大きさに驚いた。

少年は暖かいコーヒーを手に、小屋に戻った。しばらくすると、老人が目を覚ました。老人は、話し相手がいる楽しさを痛感した。海を相手におしゃべりするよりはずっといい。「お前がいなくて寂しかったよ」

少年は食べ物と新聞をとりに行った。彼は歩きながら泣いていた。老人はうつぶせのまま再び眠りに落ちていた。小屋に戻ってきた少年は傍らに座って、その寝姿を見守っている。老人はライオンの夢を見ていた。

偉大な作品との再会

I. 作家と作品

この作品の作者、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) は1899年、シカゴで生まれる。行動的な父の影響もあり、幼い頃より水泳、釣り、狩猟、乗馬などの手ほどきを受け、自身も行動的であった。そのためか、スペイン内戦や第一次世界大戦にも積極的に関わるなどし、それを元に小説を書いた。そして1954年、『老人と海』 (*The Old Man and the Sea*) でノーベル文学賞

受賞。しかしこの年、2度の航空機事故に遭う。2度とも奇跡的に助かったものの、かつてのように活動的に動くことはできなくなってしまった。さらに数年後にはキューバ革命が勃発し、長年暮らしてきたキューバでの生活が危うくなるのではという不安に駆られ、ノイローゼ気味に。事故による後遺症も加わり、執筆活動が滞りがちになる。そして1961年、ライフルで自らの命を絶ってしまった。実に活動的で、壮絶な人生を送ったヘミングウェイであった。

II. 偉大な作品との出会いと再会

私が最初にこの本を手にしたのは、高校入学が決まった頃であった。私が入学した高校では、入学前に各教科から課題が与えられる。数学や英語は買ったての教科書の中から数ページだけ予習をしておくという、すぐにできる簡単なお決まりのものであった。しかし、国語だけはそうはいかなかった。ただでさえ国語に苦手意識を持っていた私には、本当に憂鬱な課題であった。それははずばり、読書感想文。しかも題材は自分で自由に選べるわけではなく、指定されたものの中から一冊選ぶというものであった。昔から読書が嫌いでお金を避けてきたこともあり、指定図書の一覧表を見てもタイトルは知っていても内容はよく知らない本ばかり。どの本を選べば宿題を早く終わらせることができるか…そんなことばかり考えていた。

そんなある日、高校入学の準備品を買うために母とでかけた先に、大きな本屋があった。これだけ大きい本屋なら、指定図書の一覧表に載っていた本がすべて揃っているだろうと思い、母と一緒に探し始めた。すると母が一冊の本を、憂鬱そうに本を探す私の元に持ってきた。それが『老人と海』だった。母も学生時代に読んだことがあるらしく、有名な作品だから一度くらい真面目によんでみたら？と勧められた。本が意外と薄かったことと、母が勧めてくれたこともあり、私は結局『老人と海』を読むことにした。

早速、家に帰って読み始めたのだが、なかなか物語の世界に入り込むことができず、読むのがだんだん嫌になってきた。結局最後まで嫌々読んで、当たり障りのない感想文を書いて提出した。それから約5年間、本棚の隅のほうからこの本が動くことはなかった。

そして大学生になり、米文学を勉強する機会ができた。この小論文を書くとなった時、題材を何にしようか悩みに悩んだ。ふと教科書に目をやった瞬間、ヘミングウェイという名前が飛び込んできた。本棚の隅に追いやられた本の存在を思い出し、また懐かしくなって、もう一度触れてみようと思い立ち、こうして書くことにしたのであった。

高校生のころは何の面白味もないだらだらしした物語としか思えなかった。しかし今読んでみると全く違った印象を受けた。作者であるヘミングウェイの人生と照らし合わせながら読んだり、行間を読むとだんだん面白くなってくる。この作品には人間の孤独というものが見える。主人公の漁師は思いもよらぬ大きなものを得たが、それもつかの間の夢であった。ヘミングウェイも同じだったのではないだろうか。ヘミングウェイはこの作品で数々の賞を受賞し、名声を得た。もちろん現在でも歴史に名を残す素晴らしい作家として知られているが、彼にとってはそんな名声もつかの間のことであったのだろう。

ヘミングウェイが本当に望んだものは何だったのだろうか。そんなことを考えさせる、とても深い作品である。彼の人生とそれを反映したこの作品を、これからも後世に伝わってほしいと思う。

(おおたに・きょうこ：欧米言語文化講座 英語圏)

ヘンリー・ジェームズ「ねじの回転」

:得体の知れない恐怖を読み解く

田路史歩

ヘンリー・ジェームズ「ねじの回転」

あるクリスマス・イヴの夜、私たちは暖炉にたむろしながら怪談話に聞き入っていた。そんな中、誰かの何気ない発言をきっかけにこれから私がお聞かせする話をダグラスの口から引き出すことになった。ダグラスは話をろくに聞いておらず、何かを話そうとしているようだった。私たちはそれを待ちかまえ、ついに二晩目、みんなが引き上げようとする間に彼は口を開いた。それは、彼の知り合いの美しい家庭教師が体験した「全般にわたって、不気味な醜さと、恐怖と苦しみの物語」。彼はそれを書き綴った原稿を何年もしまい込んでいたのだが、それが彼のもとに届いた次の晩、静まり返った聴衆の前で語り始めた。

彼女は20歳のとき家庭教師になるためにロンドンにやってきた。雇い人は田舎から出てきた彼女にとってはついぞお目にかかったことのないような魅力的な紳士で、二人の子供の家庭教師を任されることになった。しかしこの仕事にはある奇妙な条件が付いていた。「家庭教師は彼には金輪際面倒をかけないこと。彼に苦情を言ったり、手紙を書いたりせず、自身で問題を解決すること。」ここまで話したあとダグラスはいったん席を立った。翌晩、ダグラスは著者の美しい筆跡をそのまま耳に移そうとするかのような明活さで、朗々と読みはじめた。

わたしはあの方のご依頼に応じて以来、ただ興奮と失望の連鎖で落ち着かずにいられなかった。しかし馬車に揺られながら突然眼前に現れた美しい屋敷を見て嬉しい驚きを感じた。しかもこれから世話をすることになる二人の幼い子供は生まれてこのかた見たこともないほど美しい兄妹・マイルズとフローラで、兄のマイルズはわたしが赴任してすぐに退学になったためどんな子供か心配したものだが、一目見た瞬間これほどかわいい清純なものに悪名を着せるなどは実に奇々怪々だと感じるほど神々しい少年だった。最初に感じていた不安は消え去り、私は彼らのお世話をしながらゆったりと美しい日々を過ごしていた。

しかしある日を境にその生活は一変する。それは実に恐ろしい日々の始まりであった。わたしが散歩中にふと塔の上を見ると、見知らぬ男の顔が見えた。彼はあの魅力的な紳士でも、他のどこでもついぞ見たことのない顔であった。その上不思議なことにあたりは一瞬にして静まり返り、物悲しい場所に一変してしまった。彼が向こうむきになるまでの長い間互いににらみ合い、それからあとは何も記憶していない。わたしは激しいショックに呆然とし、彼が一体誰なのか思案し続けた。また別の日にフローラと湖に出かけたときには別の女がこちらを見ていて、その後消え去るという出来事があった。

この事件を昔から屋敷にいる同僚に打ち明けると、それはかつてこの屋敷にいた召使クライアントと家庭教師ジェスルではないかと教えてくれた。彼らは子供たちをあちらの世界に引き込もうとしているのだ。しかも近頃の子供たちの様子を見ると、幽霊たちとグルになって私

を狡猾に騙そうとしているようなのである。“あなたは見ているわ、見ているわ！あなたは、たしかに、自分でもそれを分かっているし、その上私がそれを感知していることも、ちゃんと分かっているでしょう。さあ、なぜ率直にその事をわたしに打ち明けないの？”そう思いつつも口に出せずにいた。これをすぐに口に出していたなら、あんなことにはならなかっただろうに…。

月が煌々とあたりを照らし出すある晩、私は芝生の上に塔の上を見上げて立つ影を見つけた。芝生の上の人物は、小さいマイルズその人だった。わたしがテラスに現れるやいなや、彼は私の方に駆け寄り、二人でその場を後にした。彼は今どれほどおかしくない弁解を探し回っているだろう？もはや彼は無邪気を装うことはできまい。ついに彼らと幽霊の接触を証明できる！わたしは興奮していた。すると、マイルズはこう言った。

「先生に、僕のことを、——気分転換に——“悪い子”だって思われたかったの！」
これで事実は何もかも終わりだった。彼は完璧に釈明してのけたのだった。その後わたしはついに後見人に手紙を書くことを決意した。

その後、幽霊を見ることができないためにその存在を信じ切れていなかった召使がフロアの態度の豹変を見て信じるようになり、彼女を屋敷から遠ざけることにした。それと同時にわたしが書いた手紙が無くなったことが分かり、マイルズを問い詰めた。すると、彼は初め否定していたものの、やがて盗んだことを認めた。そして学校を退学になった理由を問い詰めようとしたその時、彼の告白を遮ろうとするかのように恐ろしいクイントの幽霊が窓に顔を押し付けていたのだ。再び戦いが始まったのだと知り、くらくらした。

「ピーター・クイント——畜生！」

マイルズはついに最後の降伏のしるしであるその名を叫んだ。

あんな男、どうだっていいでしょう？あなたは、わたしのものよ！」

マイルズは目をららんとさせ辺りを睨んだが、目に見えるのはもう静かな真昼の陽光だった。わたしは彼を抱きすくめて正気にかえらせた。奈落に転落する寸前に捕まえたようなものだった。しばらくするとわたしは自分の抱きしめているものが、本当はなんだったか判りはじめた。悪霊を払いのけられた彼のかわいい心臓は、鼓動の音が止んでいた。

得体の知れない恐怖を読み解く

I. 作家と作品について

ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) はイギリスで活躍した作家であるが、実はアメリカ出身である。彼はボストン名門の知識階級の出身であり裕福な家庭に育った。しかしアメリカの文明が実利主義であることに強く反発し、イギリスに帰化したのだ。イギリスの他にもヨーロッパ各国を訪問したため、国際的な視点で描いた作品が多く残されている。「登場人物たちの心理に明確な光が一方から当てられ続ける」(川崎 137) というのが彼の技法上の特徴的な点だと言える。また、「意識の流れ」という人間の意識を流れるように捉える心理描写の方法を最初に用いたという点でも有名である。

「ねじの回転」 “The Turn of the Screw” は1898年に発表された小説である。ある男が女家庭教師の手記を読むという形で物語が進行していく。作中にはこの家庭教師以外の心理描写は全くなく、これが物語を読み解く上での大きなポイントになっていると言えるだろう。

II. この作品が書かれた当時のイギリス

彼のようなアメリカ出身者がイギリスで活躍した背景には、「イギリスの衰退」がある。ヴィクトリア女王が死に、南アフリカと闘ってはっきりとした勝利を勝ち得ることができなかったという経験がイギリスの栄光に影を落とした。そしてそれは文学にも影響を与え、彼をはじめポーランド人のコンラッドやアイルランド人のイェイツなど、いわゆるアウトサイダーを受け入れて活性化をもたらすという動きに発展していったのである。

III. 本当に幽霊は存在しているのか

「この作品は幽霊小説である。」これを聞いて私たちが普段読むようなホラー小説、あるいは映画を思い浮かべると肩透かしを食らった気分になる。なぜなら派手な超常現象が一切無く、いつてしまえば「そこに幽霊がいる」ということしか起こらないからだ。だから読んでいて自分の背後が気になる、などといった種類の怖さは全くない。しかしだからといってつまらない小説だということではない。登場人物の奇妙な関係やかけひき、巧みな心理描写によって物語の世界に引き込まれてしまうのだ。女教師の古い価値観や表現に多少違和感を感じるものの、100年以上も前の作品をこれほど面白く読めたことに驚いた。

しかし読んでいく中である疑問点が浮かんだ。それは「本当に幽霊は存在しているのか」ということである。幽霊小説と言われているにもかかわらず幽霊が存在していないというのは奇妙な話である。しかしこの物語は女教師の視点のみで語られていて、幽霊も彼女を通して見たものであり、彼女の他に幽霊を目撃した者がいない。また彼女が子供たちを守ろうとして動けば動くほど彼らは幽霊に怯えて彼女から心が離れてしまっているし、彼女は子供たちは幽霊が言えないふりをしていると言っているがそれは単なる憶測ともとれる。なにより読者から見ると彼女は過剰に興奮してしまうところがあって、少し異常に感じてしまうのである。つまり、子供たちを脅かすものに対する意識が強すぎるが故の妄想の産物であるとも考えられるのだ。

IV. 分かれる解釈

私が考えた以外にも、この作品は多くの解釈がなされている。たとえば作中の幼い兄妹と男女の幽霊が同性愛関係にあるという考えだ。確かにそれをにおわせるような描写も見られるし、子供が「好きな子に言っちゃいけないことを言った」からという不自然な理由での退学も、幽霊の影響で級友にもそれを迫ったせいだと理解できる。あるいは女教師が冒頭で青年貴族に強く魅かれる描写があるのだが、一方で彼に絶対に接触してはいけないという契約のせいで抑圧せざるをえない。そのため幽霊によって子どもたちが危機に陥っているという、彼が助けなければいけないような状況を心の奥底で望んでいて、それが妄想となって表れたという解釈もある。

このように解釈が分かれる大きな理由は、この物語があまりにも多くの謎を残したまま完結してしまっているからである。なぜ最後に子供が幽霊から解き放たれたにもかかわらず死んでしまったのか、なぜ子供は退学になったのか、なぜ幽霊は女教師と子供たちの前にしか現れないのか、本当に幽霊なんて存在しているのだろうか…これらの疑問を残したまま、物語は突然寸断されるかのように終わる。

実はこれこそがジェームズの真の意図だったのではないだろうか。大きな事件も起こらず幽霊の存在すら危ういような小説をあれやこれやと解釈し、登場人物の関連性を頭の中で補完するなどといった読者の想像力を利用しているように感じるのだ。つまり、私たちは自らの妄想で物語を怖くしてしまっているとは考えられないだろうか。

V. 「ねじの回転」の意味するもの

「ねじの回転」というタイトルは、一見物語に何の関係もないように見える。しかし一方方向にぐるぐると回って突き刺さっていく様子は、まるで女教師が幽霊あるいは妄想に取りつかれて後戻りできないまま深みにはまっていくようだ。あるいは親指をねじで締め上げる拷問具を指していて、聞く者が悲鳴を上げるほど怖い話の比喩表現であるという見方もある。いずれにせよ「ねじ」は得体の知れない恐怖を表している。また読者にとっては、序盤は登場人物の心理的な駆け引きにより堂々巡りしてあまり話は進まず、後半気がつけば一気に話が急降下していく様が、ぐるぐる回ってあまり動いていないように見せかけ気づけば深く突き刺さっている、まさに「ねじの回転」のように感じられるだろう。

VI. あとがき

この小説は心理描写が素晴らしいと感じた。私にとっては幽霊よりも、女教師が何としてでも子供たちを守ろうとする狂気じみた感情が恐ろしかった。暗示にかかったかのように子供たちを盲目的に愛し、彼らを外敵から守ろうとする姿勢が過剰すぎるため、幽霊は彼女が作り出した妄想なのではないかとの推測に至った。これほど怖い作品なのにホラー映画のように主人公を追いかけまわしたり、地面を這いずり回ったりすることはせず、極端な言い方をすれば幽霊があまり仕事をしていないというある意味とてもおもしろい小説だった。

参考文献

川崎寿彦『イギリス文学史』成美堂、1988年

(とうじ・しほ：欧米言語文化講座 英語圏)

リチャード・バック『かもめのジョナサン』

:生きることの真意

道 廣 恵 理

リチャード・バック『かもめのジョナサン』

主人公はカモメ。ジョナサン・リヴィングストンは、ほかのカモメたちが餌をとるために飛ぶことに対して、飛ぶという行為自体に価値を見いだしていた。ほとんどのカモメにとって、どうやって岸から食物のあるところまでたどりつき、さらにまた岸に戻ってくるか、それさえできれば充分であり、重要なことは飛ぶことではなく、食べることだった。

しかし、ジョナサンにとって重要なのは、食べることよりも飛ぶことそれ自体だったのだ。仲間たちから妙な目で見られようとも、ジョナサンは食べる時間を惜しんでは低空飛行や高速スピードでの飛行練習に取り組んでいた。

「ぼくは自分が空でやれることはなにか、やれないことはなにかってことを知りたいだけなんだ。ただそれだけのことさ」

そして彼はついに時速342キロのスピードで飛ぶことに成功した。ジョナサンは自分の発見したことを皆に分かち合い、自由になれる希望を示そうと思っていたが・・・

「ジョナサンはカモメ一族の尊厳と伝統を汚した」

といわれ、カモメの社会から追放され、一人暮らしの流刑に処せられた。

それでも飛行練習をやめなかったジョナサンの前に、光り輝く2羽のカモメが現れた。彼らはジョナサンに「もっと高いところへ、本当のふるさとへ連れていく」といって暗黒の空のかなたへとジョナサンを連れていった。

そこには、輝く翼を持ち、流れるように楽々と風に乗って飛行する鳥しかいなかった。毎日、何時間も高等飛行法を練習している鳥しかいなかったのだ。ジョナサンもその中でより高度な飛行法を身に付けた。

ある日、ジョナサンは長老のカモメ、チャンと出会う。チャンはジョナサンに「自分に限界を感じるな」といって瞬間移動の技を教え、ジョナサンはその技を体得するに至る。

そしてジョナサンは、このことを地上にいるほかのカモメたちと分かち合いたいと強く思った。優しさについて学べば学ぶほど、また、愛の意味を知ろうとすればするほど、彼は一

層地上に帰りたいという思いに駆られた。飛ぶことの本当の意義を知ろうとしているカモメがいるのではないか、昔の自分のように……。ジョナサンは地上に戻り、ここで知りえたことを地上のカモメに教えてあげたい、という気持ちから地上に戻ることに決めた。

地上に戻ったジョナサンは、まずは同じように群れから追放されたカモメたちからジョナサンの思想を広めようとした。

「われわれ1羽1羽が、自由という思想のもと飛行しなければならない」

この思想のもと、ジョナサンを含む追放されたカモメたち8羽は群れに戻ることに決めた。

もちろん最初は歓迎されなかった。しかし群れの皆に素晴らしい飛行法を披露していくうちに、次第に1羽、また1羽とジョナサンたちに興味を持ったり、尊敬したりするカモメが現れた。

ジョナサンたちが群れに合流して1週間後、ジョナサンの教え子であるフレッチャーが間違っ岩にぶつかってしまい生と死の間をさまよった。そんなときジョナサンが「われわれの肉体は思考そのものであって、それ以外のなにものでもない」ということをフレッチャーに語りかけた。するとフレッチャーは目を開けたではないか。この光景をみて周りのカモメたちは、

「生き返らせた！悪魔だ！群れを破滅させるためにやってきた悪魔なんだ！」

といて、ジョナサンとフレッチャーを殺そうとする。2羽は瞬間移動してその場から姿を消してしまう。フレッチャーは聞く。

「群れに戻って他のカモメたちの学習の手助けをすることこそ、群れを愛すること、とジョナサンはおっしゃったが、もう僕は群れを愛せない」

「カモメの本来の姿、つまりそれぞれの中にある良いものを発見するようにつとめなくちゃならん。彼らが自分自身を見いだす手助けをするのだ。わたしのいう愛とはそういうことなんだ」

という言葉を残し、ジョナサンは消え去った。そしてフレッチャーは群れに戻り、自由という無限の思想のもと、完全なるものへの第一歩を踏み出したのだった……

生きることの真意

I. 作家と作品について

著者リチャード・バック (Richard Bach) は1936年イリノイ州、オーク・パークで生まれた。大学に入学したが、退学してアメリカ空軍に入隊、1957年にはパイロットの資格をとった。翌年、彼はフリー・ライターになり、ニューヨークやロサンゼルスで飛行機雑誌の編集にたずさわった。ベルリン危機が訪れ、再び空軍に呼びもどされた彼はフランスで1年を過ごした。彼の妻、ベティもパイロットであり、彼女専用の飛行場で軽飛行をしている。

1963年に彼の処女作である *Stranger to the Ground* が出版された。第二作 *Biplane* は1966年に出版された。この2作は、アメリカ図書館会から若い人のための良書25冊の中に選ばれた。そして、この第三作『かもめのジョナサン』(1970年刊)は、アメリカで、『風と共に去りぬ』をしのぐ超ベストセラーを記録し、現在世界各国で話題の書となっている。

II. 1970年代とは

『かもめのジョナサン』は寓話である。寓話とは、道徳的な教訓を伝えるための短い物語のことである。この『かもめのジョナサン』が流行した1970年代とは一体どんな時代であったのであろうか。

日本では高度経済成長が一段落し、オイルショックにより高度成長は終焉を迎え低成長時代に移行した。「国民生活に関する世論調査」で「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい」とする人々の割合が「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」とする人々の割合を初めて上回ったそうだ。

世界では新保守主義の台頭が始まった。新保守主義とは経済政策における自由主義、社会政策における保守主義を指し、以前の産業保護、伝統主義などの旧保守主義と対比される。

これらの時代背景を踏まえて再び『かもめのジョナサン』と読んでみると、「重要なのは食べることではなく、飛ぶことだ。自由のもとに飛ぶことだ」とジョナサンが言う言葉が深く心に突き刺さる。

III. ジョナサンが教えてくれること

普通のカモメは生きるために食物を食べ、飛んでいる。そこに生きるものの意味や飛ぶことの意味を追求しようとはしない。なぜならそうしなくても充分生きていくことができるからである。しかしジョナサンは違った。彼は自らの生きる意味を追求し、そこに向けてひたすら行動を起こした。社会の中で、大衆の中で、家族の中で、一般常識を超えた行動に対する、非難と孤独、自分自身と戦いながら挑戦を続けるジョナサン。そして最後まであきらめず、自分の可能性を信じ、仲間の元に戻り、次の世代にカモメの可能性を伝授する愛情。そしてジョナサンの意思を受け継ぎ、ジョナサンがいなくなった後でもこれからの未来に希望を見いだすことができるのである。

いざ自分のことを振り返ってみる。周りの目を気にして、周りの人と合わせて、生きることに食欲になっていない自分がいた。「別に何も考えなくても毎日生活していけるし」「周りになんとか合わせておこう」「自分ではない誰かが世の中を動かしてくれるはず」という気持ちが私にはあった。この「かもめのジョナサン」という、1羽のカモメがカモメの社会を変えていく話を読んで、自分のこれまでの生き方を恥じた。よし、私もジョナサンのように頑張ってみよう、と素直に思えた。

IV. われらすべての心に棲むかもめのジョナサンに

「われらすべての心に棲むかもめのジョナサンに」この本にはこのフレーズが前置きとして書かれている。最初は「一体どうゆう意味なのだろう」と思っていた。しかし、最終的に著者のこのフレーズが、私の心にずっと染み込んだ。そう、誰もがかもめのジョナサンになれるのだ。その可能性を秘めている。私はこの本に出逢ったことによって、意識を高く持ち、ジョナサンのようになりたいと思った。心に棲むかもめのジョナサンに呼び掛けてみたいと思った。生きることの真意を教えてくれた本に出逢えたことに感謝。

(みちひろ・えり：欧米言語文化講座 英語圏)

マーク・トウェイン『不思議な少年』

:作品の作られた背景

向井理恵

マーク・トウェイン『不思議な少年』

舞台は16世紀のオーストリアにある小さな町。とても平和な町だった。その町に、ある日サタンと名乗るそれはそれは美しい少年が、突然姿を現す。

彼は、不思議な少年だった。その場に居た少年テオドールが持っているパイプにサタンが息を吹きかけると、なんと真っ赤な火がついた。また、彼は欲しいものをなんでも作り出したり、人の心を読んだりすることまでできた。

そう、彼には、不可能なことなどなかった。まるで魔法使いのようなサタンだったが、テオドール少年に「君はいったい誰なのだ？」と尋ねられると・・・

「天使だよ」と答えたのであった。

天使と名乗る彼だったが、彼には全くもって感情というものがなく、人間の気持ちを理解することができなかった。そのため彼は平気な顔をして人を殺してしまったりする。

そんなある日、彼の目の前をピーター老神父が通りかかり、財布を落として行ってしまう。ピーター老神父はとても貧しく、生活にも困っていた。そこでサタンは、その財布の中に大量の金貨を入れてピーターに返した。

ピーターの生活は助けられたのだが、悪徳な星占師が、自分の持っていた金貨がなくなった、ピーターが大量の金貨を手に入れたのは、自分の金貨を盗んだのではないかと言い出した。

こうしてピーターと星占師の間で裁判が行われた。ピーターの有罪が確定しそうなところで、サタンの計らいによって裁判は一転し、ピーターの無罪が証明された。

しかし、裁判の後、サタンは牢屋のピーターの所へ行き、こう告げた。

「裁判は終わりましたよ。判決が下りて、あなたは永久に泥棒の汚名を着ることになりましたからね。」

サタンのこの言葉を聞き、無罪判決が出たことを知らないピーターはショックで正気を失ってしまった。そして、気が狂ったピーターは自らを国王だと思い込んでしまった。そうし

て「皇帝にできないことはないのじゃ。」などと言って堂々と行進までして家に帰って行った。

全てを知るテオドール少年が、「なんという嘘をついてだましたのだ!!」となじると

サタンはこう言った。

「彼はこれからもずっと皇帝のつもりでいるだろうし、皇帝という喜びは、死ぬまでずっと続くよ。国中でただ一人の本当に幸福な人間になったのだ。」

それを聞いたテオドールが「狂人なんかにしなくて、幸福にできたんじゃないか？」と尋ねると、更にサタンはこう答えた。

「ぼくはね、あの神父から、人間が『心』などと称しているまやかしものだけを、そっくり取り除いてしまったんだ。ぼくは彼を永久に幸福にしてやると言ったんだよ。」

ピーターに狂気を与えることで、彼を幸福にしたとサタンは言うのだ。

それから、サタンはテオドールを連れて世界中を旅し、たくさんの不思議をテオドールに見せた。

そして、町の人に様々な影響を与えたサタンであったが、ある日宇宙で仕事があるからと言って、町を去ってしまった。

テオドールに

「何も存在などしちゃいない。すべては夢なんだ。神も、人間も、世界も、太陽も、月も、それからあの無数の星だって、すべては夢にすぎん。ただあるものは空虚な空間、そして君だけなんだよ」

と言い残して・・・

作品の作られた背景

I. Mark Twainについて

Mark Twain (1835～1910) は『トム・ソーヤの冒険』や『ハuckleベリー・フィンの冒険』などの作品で有名な作家である。アメリカではもともとユーモア作家としての評価が高く、楽観主義を代表する作家だった。しかし、晩年は人間不信に陥り、悲観主義に彩られた作品を書くようになった。これは、彼が出資していた出版事業が倒産し、娘が他界し、また更には愛妻が病気になるってしまったことが原因だったようだ。この『不思議な少年』(The Chronicle of Young Satan) はそんな彼の最後の作品であり、悲観主義の代表的作品である。

II. 『不思議な少年』について

この作品は、作者の死後、6年目の1916年に出版された。その際に、編集者の手が加わって、作者の残した原稿とは、少し違う内容になってしまった。Mark Twainの死後、その文学遺産管理人となったアルバート・B・ペインによってこの作品はまとめられた。

III. 時代背景

1980年代のアメリカは、従来西へ西へと広がっていた自由な土地が消滅し、辺境が消失した時期である。新興国アメリカにとって、発展が妨げられ、自由への希望が、大きな壁にぶつかった一時期であった。こうした時代背景とも伴って、彼は悲観主義へと導かれていったのではないだろうか。

(むかい・りえ：欧米言語文化講座 英語圏)

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』 (ごきげんなペンキ塗りのお話)

:いきいきとした子どもたち

結城秀佳

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』(ごきげんなペンキ塗りのお話)

普段からの度重なる悪事の罰としてトムは、ポリーおばさんから学校が終わったら家の塀のペンキ塗りをするよう命じられてしまいました。しかしトムはそんな事はおかまいなく、放課後、友人のベンが持ってきた野球のボールを使ってみんなで野球に明け暮れ、遊んでいる途中に無くしてしまったボールを捜したりするうちに夜になってしまい、辺りが暗くなってから帰宅する始末です。業を煮やしたポリーおばさんは翌日、土曜日で学校が休みなので、トムがサボらないようにペンキ塗りを見張ると言いだします。トムは嫌々ながらもペンキ塗りを始めますが、塀はたいそう長く、とても今日中に終わりそうにありません。

トムは後に見つけた野球のボールを餌にベンにもペンキ塗りを手伝わせていると、そこに友人が通りかかりました。そこでトムにまた名案が閃いたのです。

トムの友人が

「僕これから泳ぎに行くんだ。君も行きたいだろうな。でも、きみはいけないな。仕事があるんだもの。」と言いました。

「仕事だって？」

「そうさ、ペンキ塗りって言う仕事さ。おばさんに無理やりやらされている、つらい仕事さ。」

「つらい仕事なもんか。子供が塀を塗らしてもらえるなんて、めったに無いことなんだぜ。それにこれは、トム・ソーヤーじゃなくちゃできない仕事なんだ。」

「・・・、なあ、おれにもちよっと塗らせろよ。」

「だめだよ。この塀表通りだろ？上手に塗らないポリーおばさんとてもうるさいんだ。これがうまく塗れる子なんて、さあ千人にひとりいるかな？もしかしたら二千人に一人かもしれないな。ジムもやりたがったんだ。でもおばさんがいけないって。ぼくの弟のシッドもやっぱり断られたよ。なんといってもこの仕事はトムに限るって・・・。」

「ちよっとでいいからさ、トム。」

「うん、ぼくもやらせてやりたいさ。だけど、なにしろおばさんがうるさいんだよ。」

「りんごの芯、やるから、だからいいだろ？」

「うん、でも、ぼく怖いな。やっぱり、おばさんに見つかったら・・・。」

「りんごぜんぶやるから！」

こうしていかにもペンキ塗りを楽しそうにする事で、通りかかる友人たちは次々とペンキ塗りをやりたがるようになり、友人たちはペンキ塗りをさせてもらうお礼として次々にビー玉やリングをトムにあげてペンキ塗りをさせてもらいました。こうしてトムのペンキ塗りを冷やかに来た友人たちは、みんなトムの罠にはまって、持ち物を差し出してペンキ塗りをさせてもらい、塀は一日で見事に塗り終わり、トムは友人たちからたくさんの物をもらい、またポリーおばさんからペンキを塗り終えた事を誉められるのでした。

いきいきとした子どもたち

I. マーク・トゥエインについて

1835年11月30日、アメリカのミズーリ州にあるフロリダに生まれる。本名サミュエル・ラングホーン・クレメンズ。12歳のときに父が死亡、学校を中退、新聞社で植字工見習として働く。やがて、子どもの頃からの夢だった“アマゾン探検”を果たそうと、22歳のとき、蒸気船でアマゾンに向かうが、資金不足のため、そのまま蒸気船の水先案内人として働く。この頃の思い出と数々の体験から『トム・ソーヤーの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』が生まれる。トゥエインは27歳の頃から新聞・雑誌等に投稿を始め、1865年、ニューヨークのサタデー・プレス誌に送ったユーモア短編小説『ジム・スマイリーと彼のだじな跳び蛙』が好評を博し、作家としてその第一歩を踏み出した。1870年、35歳の時に、富豪の娘オリピアと結婚。その後約20年にわたり、次々と作品を発表した。トゥエインは晩年、事業の失敗、妻と子どもたちの死などで薄幸の人生を送った。1910年死去。74歳。

II. この物語の読みどころ

やはり一番の読みどころは、トムの人並みはずれた発想力に友人達がみなだまされていく部分である。自分にとってやりたくない、いやな仕事を、どのように乗り切り、さらには自分に利益が舞い込んでくるよう子どもならではの悪知恵を働かせ、まんまと思い通りに困難を乗り切る。あの発想の転換力には誰もが驚かされるし、トムの悪がきつぷりが大きく読者に伝わる場面であろう。その場面をどこかユーモアな部分を持たせて描いている部分にも注目してほしい。

III. 子どもの在り方

この物語で描写されているトムを含めた子どもたちは、どこかおおらかで健気、自由気ままな心を持っているように感じられる。特に私が思うのは、学校での生活や、とりわけ遊びのなかで友人たちとの絆や信頼を深め、仲間を大切にすることを養っているというものが非常に伝わってきた。それは例えば友人をからかっているシーンや、ケンカをしているシーンであっても、やはりそこにはどこか温かさのようなものが含まれており、メディアを通して見える現代の子どもたちとはどこか違うように感じられる。一概にどちらの子どもたちが正しい、間違っているとは言えないが、子どもという存在の根底にある何か大切なものというのがすべて、この『トム・ソーヤーの冒険』には描かれている、そんな気がした。

(ゆうき・ひでよし：欧米言語文化講座 英語圏)

『トム・ソーヤーの探検』

:少年たちの大冒険にわくわく

卯野智広

『トム・ソーヤーの探検』(Tom Sawyer Abroad, 1894)

この物語の主人公トム・ソーヤーは勉強がよくでき、物知りであり、幼いころからおばさんのポーリーに育てられた。しかし、とてもいたずらがすきで、勇気のあるわんぱくな少年である。トムが一番仲の良い友達にハックルベリー、通称ハックがいる。ハックはかつて孤児であり、家もなかった。そして、もう一人仲の良い友達にジムがいる。ジムは富豪の農園などに働きに行き暮している。体が大きく、力持ちだがハックと同じであまりかしこくない。この物語は飛行船に乗って、アメリカを横断し、海を越え、アフリカまで冒険した三人の少年の物語である。

ある朝、トムはハックの家にとんで来て、ハックをたたき起した。見ると、まだ配達されたばかりの新聞を持っている。「おきろ、ハック。ぐずぐずしているときではないぞ。新しい飛行船が飛ぶんだ。しかも、世界一周の旅に飛び立つんだ。」こうしてトムにたたき起されたハックともう一人の親友ジムをつれて、トムはセント・ルイスの町へ出かけた。

町では飛行船を発明した博士と見物人がなにやら口論をしている。「これでも飛行船かね。こんなものじゃ、世界一周どころか、アメリカを飛ぶのだってあやしいものだ。」「どいつもこいつも、あきめくらのとんちきめ。わしはアメリカの名を世界にとどろかす大恩人だぞ。今におまえたちのこどもが、わしの記念碑を建て、感謝する日が来るぞ。その時になって、悪いことをしたと後悔するな。」博士が顔を真っ赤にし、ひげをふるわせながら怒鳴っているなか、三人が飛行船の中を見学していると、ものすごいさけび声が足の下の方から聞こえてきた。なんと、飛行船は三人を乗せて飛び立ってしまった。

飛行船の中で博士は急に大声で話した。「おおばかもめが。やつら、わしの大切な機械の秘密を盗もうとしおったな。だまされんぞ。これは世界で一番新しい発明だ。誰もわしの秘密を知ることにはできんぞ。わしは教えてやらん。わしをばかにした罰だ。わしはこの飛行船で世界を一周したら、秘密を抱いたまま海へ沈んでやるんだ。」おそろしいことを言い出す博士に、三人はがたがたおびえていた。

飛行船はニューヨークの港を通り越し、海におどりでたある日、ウィスキーを一人で飲んでた博士は泥酔し、飛行船の外に飛び出してしまい、海に落下した。三人は死んだ博士

士が気の毒になり、悲しみにくれていた。博士もいなくなってしまう、ここから三人だけの波乱万丈な冒険が始まった。

三人はイギリスを目指して飛んでいたがサハラ砂漠についてしまう。ここでは、野性のライオンやラクダに乗ったキャラバンの人たちなど初めて見るものばかりである。広大な砂漠で三人は盗賊にさらわれた子どもを助ける、ミイラを発見する、オアシスを見つけ、水のありがたさを知る、などと普段経験できない様々な経験をした。

そして、三人はついにエジプトの象徴ピラミッドとスフィンクスを発見する。本でしか見たことのないピラミッドに三人は大はしゃぎである。「本当にあれがピラミッドなの。間違

いないね。」「はやく、はやく行こうよ。」スフィンクスの頭に登り、エジプト人の案内でピラミッドの中を見学し、カイロの町を散策するなど三人はエジプトを満喫していた。カイロの町はとてめかわっている。狭い道があちこちつながっており、両側にはテントをはった店がぎっしり並んでいる。ターバンを頭にまいたエジプト人たちがぞろぞろおり、女性はみんな目だけだしたきれを被っている。エジプトはアメリカとなにもかもが違い三人は目を輝かせていた。エジプトを満喫しているとトムはこんなことを言い出した。「写真を撮ろう。見物したところで僕たちの写真を撮れば、エジプトに来た立派な証拠になるじゃないか。」そこで、ジムに一旦アメリカに戻ってもらい、トムの部屋にあるカメラを持ってきてもらうことにした。トムはついでにポリーおばさん宛の手紙をジムに預けた。手紙にはこんなことが書いてある。「今、木曜日の午後です。トムは、アラビアの山の上で、ポリーおばさんのことを考えています。ハックもおばさんによろしくと言っています。トム・ソーヤー」こうしてジムは飛行船に乗って飛び立った。

ジムは予定の時間にカメラを持って帰って来た。しかし、うかない表情でおどおどしている。「どうしたんだい、ジム。ちゃんとカメラを持ってきたじゃないか。」ジムは静かに口を開いた「ポリーおくさんに見つかってしまった。ポリーおくさんは、トムさんにすぐ帰ってくるように命令した。こりゃ面倒なことになったもんだ。トムさんどうする。」さあ、大変。あの、口うるさいポリーおばさんに見つかったのなら、帰ったら叱られるに違いない。「しかたがない、帰ろうか。」トムは小さな声で言った。三人は落胆した。三人の大冒険はあっけない形で終わりを迎えた。

少年たちの大冒険にわくわく

I. 作者紹介

マーク・トゥエイン (Mark Twain) は1835年、ミズーリ州の寒村フロリダに生まれ、4歳の時、一家でミシシッピ川の港町ハンニバルに移住。47年父の死により印刷工となって各地を転々とした後、ミシシッピ川の蒸気船の水先案内となる。南北戦争を経て、62年新聞記者となり、63年からマーク・トゥエイン(水深2尋という意味の水夫用語)というペンネームで署名入り記事を書き始める。65年、短篇「ジム・スマイリーとその跳び蛙」(改題後「その名も高きキャラベラス郡の跳び蛙」)を発表して人気作家となる。主な作品は、『トム・ソーヤーの冒険』(1876)、『王子と乞食』(1882)、『ハックルベリー・フィンの冒険』(1884)、『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(1889)等。

ヘミングウェイは現代アメリカ文学はマーク・トゥエインに始まったと言っている。また、彼はいつも「私は百万人のために書く」と言っていたが、その言葉通り、彼は百万人の民衆の心琴にふれる作品を書き続け、1910年、七十五歳で永眠した。

II. 背景

著者は序文で、この小説の主たる対象が少年少女であると書いている。たしかに物語の内容は、その通りに他愛無いものに過ぎない。しかし続く文章の中で、著者は大人に対しても童心に帰って楽しむことを呼びかけている。当然のように著者もその大人の一人であり、事実この創作を通じて自身が楽しんでいる様子なども伺えることからして、本来の目的はそこにこそあったのであろうと思われる。

にもかかわらず、まず子供向きと断っているのは、この当時はこうした傾向の作品を世に問う上では隠れ蓑が必要であったからではないかと思う。つまり十九世紀後半という時代は、現在の日本のようにマンガやゲームなど、元々子供向きであった文化を高い年齢の者が楽しむことが許容されているような社会ではなく、大人はすべからず高邁な思想背景を持った価値の高い文化に与るべきであるといった権威主義的な考えが残っていたからではないだろうか。

III. リトールドをやり終えて

この作品は児童文学とされているが、児童だけでなく、大学生である私でも十分に楽しめる作品であった。この作品を読むことで、忘れかけていた童心にかえることができる。

私も含め、現代の子ども達はテレビゲームやパソコンなど、遊びの場は家の中である。しかし、幼いころ、誰もが一度は親の干渉を受けずに自分たちだけで、どこか遠くを冒険してみたいと思ったであろう。その思いから、やんちゃで自由気ままなトム・ソーヤーに思いを重ね、自分もトム・ソーヤーのようになりたいというあこがれを抱くのであろう。私はトム・ソーヤーは少年ながら、多くの人々に注目され、憧れられる一種のカリスマ性を持っていると考える。

実際に、この物語のように冒険をしたいと思っても、そう簡単にできることではない。なんの技術も知識もない少年達だけで、飛行船を操縦し、はるか遠い大陸まで飛んで行くなど、夢のまた夢である。しかし、この物語を読むにあたってそのような現実的な思考は捨てなければならない。この物語は、我々現代の子ども達が忘れかけているものを体現してくれたトム・ソーヤー達三人の大冒険を楽しみながら読むものである。

参考文献

『トム・ソーヤーのぼうけん』マーク・トウェイン著 白木茂文訳 金の星社 1980

参考web

<http://www.asahi-net.or.jp/~wf3r-sg/nt2twain.html>

http://www.m-net.ne.jp/~h-ochi/Critique/Twain/Twain_Frame.html

(うの・ともひろ：人間科学講座 人間行動学)

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』

:悪童のヒーロー

松尾 泰子

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』

「ミシシッピ河沿いの小さな町セント・ピーターズバーグに生まれ育ったトム・ソーヤーは母と死別し、ポーリーおばさんと暮らしていた。彼は好奇心の強い、鋭敏かつ多感な少年で、拘束された学校生活を極度に嫌い、しばしば学校から抜け出すと、自由を求めて森や川へ行った。それは彼がピーターズバーグの規格化した生活に反感を抱いていたからである。

ある日、トムは学校をさぼって泳ぎにいこうとするが、塀にペンキを塗る仕事を言いつけられる。だがあの手この手を使って他の子ども達に仕事をやらせる。またサッチャー判事の家の前を通りかかったとき、その家の娘のベッキーにたちまち惚れこんで、彼女にいいところを見せようとしていつもへまをやらかしていた。あるとき学校へも行かず、学校に通っていない自由人ハックルベリー・フィンと二人で共同墓地に出かけると、その夜死体を掘り出しに来たロビンソン医師、インジャン・ジョウが医師を殺すところを目撃してしまう。しかし、ジョウはマフが殺したと言ってその罪をマフになすりつける。真相を見てしまった二人は自分達が目撃していたことがばれやしまいかと気が気でない。

彼らはそこで海賊になることを決心し、ミシシッピ河のジャクソン島へ行くと、そこで海賊ごっこをして遊んでいた。島から戻ってきてみると教会では自分達が死んだものとみなされ、悲しみにくれているところだった。一方、マフはロビンソン医師殺しの容疑で裁判にかけられる。そこに出席したトムが事の真相を打ち明けると、形勢不利になったジョウは窓から逃げ出した。後日、トムはベッキーとピクニックに出かけるが、その折ベッキーと共に洞窟に迷い込んでしまう。この洞窟には、すでにジョウが逃げてきており、二人に襲いかかるが、彼は岩の下敷きになって死んでしまう。（洞窟の中に閉じ込められて餓死するという説もある。）後日、トムとハックは再び洞窟に行き宝を見つけ、それぞれ6000ドルの金が手に入りお金持ちになる。（トムのユーモア）

悪童のヒーロー

I. 作家の紹介

この作品の作者であるマーク・トウェインはよく「ユーモア作家」などと形容されるが、トウェインの笑いにあえてジャンルを与えるなら、「風刺作家」という呼称があてはまるだろう。トウェインの笑いはずっと、もったいぶった既成概念の転覆を狙ってきた。善を説くより偽善を暴いてみせること、ヴィジョンを構築するより視点をずらしてみせること、それがこの作家の真骨頂であるのだ。その意味で彼はモラリストとは対照的な破壊者であった。しかし、トウェインは、破壊者としての毒を口当たり良く摂取させるスタイルを持っていた。

II. 作品の背景

『トム・ソーヤーの冒険』は1840年代の西部の小さな町セント・ピーターズバーグを舞台にした、作者自身の自伝的要素の強い悪童物語である。中産階級が支配層となった十九世紀のアメリカで、偏屈な道徳主義が盛り上がり盛り返るほど、人々の潜在意識の中にそれに反抗する衝動が蓄積されていった可能性は容易に想像できる。トウェインのような転覆性のある笑いを持った作家がアメリカで一躍文壇のトップになったのは、解放を求める人間の精神のごく自然な発露を反映していたとも考えられるのである。しかし、悪書追放運動や福音主義の黄金時代において、中産階級の心の解放には許容範囲が設けられていた。

作者の紹介でも述べたように、トウェインの独特のスタイルは、この作家の本質的な「危険性」とばけた笑いの中に覆い隠して、その許容範囲の中に作品を置くことに成功した。『トム・ソーヤーの冒険』は、いわばそういった「許された反抗」の物語である。

III. 主題の分析

この物語の中心は、大自然ミシシッピ河とそこで遊びまわる自然児トムの関係にある。作者が少年時代に過ごした町が田舎町であることを考えれば、規格化し、文明化した社会は当然、トムの反逆の対象となる。この対立関係はポーリーおばさんとトムによっても表され、同時に、トム自身の悪童物語としての位置づけによっても強調されている。

iv. 「日曜学校もの」への反抗

十九世紀半ば、圧倒的に出回ったものに、「日曜学校もの」があった。これはきわめてメッセージ性の強い、道徳教育のための少年少女向け出版物である。「日曜学校もの」には、たいてい典型的な悪い子と良い子が登場し、悪い子はいろいろと悪さをした後、罰が当たって死ぬか、改心するかし、信仰深くて大人の言うことを何でもまじめに聞く模範的な良い子は、あらゆる名誉と幸福を手に入れた。このような「日曜学校もの」をパロディ化して書かれた『トム・ソーヤーの冒険』は、いきなりいたずら小僧トムがポーリーおばさんを出し抜いて遊びに行く場面から始まる。トムに対する最初のナレーション曰く、「彼は村の模範少年ではなかった。だが、彼は模範少年のことはよく知っていて、そいつには我慢ならないと思っていた。」学校をズル休みし、ジャムを盗み食いし、けんかをし、口先で調子よく人をついでしまう……日曜学校もの的基準から言えば、トムは手のつけられない悪童である。しかし、彼は別に死ぬこともなく、大事な人を失うのでもなく、むしろ学校仲間の人気者で、恋人もできるし、最後には宝物を発見して大金持ちにまでなる。大人の言うことを聞かない悪童がヒーローになるのだ。これは、「日曜学校もの」への挑戦だったのである。

V. 悪童物語からの脱出

このトムという悪たれ小僧が魅力的なヒーローになる背景には、この作品において、いわゆる「模範」のもととなる価値があてにならないものとして、またそのような模範的行動を強要が相当にうさん臭いものとして描かれていることがあげられる。風刺の照準はそこにあるのだ。行儀や道徳を口うるさく説きながら、自分では一切飲まない得体の知れない薬をトムに強要するポーリー叔母さん。生徒がおこしたささいな失策さえ、それを罰することに復讐的な快さを感じているように思える体罰教師のドビズ氏。人前で、子ども達に聖句を暗唱させることに喜びを感じ、それを強要する日曜学校の牧師。そして、学校に通わず野宿をして生活しているハックを彼の性格の良さ、人望を知ろうともしないで、毛虫であるかのように嫌う大人達。これらの魅力的でない権威者たちに、トムはことあるごとにゲンコツをくらったり。鞭で滅多打ちにされたりする。無実の体罰も度々である。

しかし、トムは心理的に深い傷を負うまでもなく、決定的にいじけるでもなく、漫画の主人公のようにケロリとしてそれをやり過ごし、イタズラを繰り返す。戯画的に処理することで、批判的な視点を「怒り」として際立たせず、笑いの中でぼかしつつも、トウエインは大人達の人間的な弱さを描き、その大人達が弱者である子どもに一方的な規範を押しつけることの中にある残酷さを確実に描いている。そしてそのような世界で、体罰に屈して「改心」することなく自らの「本当に楽しいこと」を追求する悪童はヒーローになるのである。

VI. トムのユーモア

学校をさぼったトムは、その罰として塀にペンキを塗る仕事を課せられる。少年たちがみな楽しそうに遊んでいる土曜日の朝、憂鬱な顔をしてペンキ塗りをしているトムを見て友達がからかう。そこで、トムは知恵を働かせて、いかにも楽しいことをやっているようなふりをする。そのため友達はその畏れにひっかかり、塀のペンキ塗りをさせられてしまう。

それでトムに課せられた仕事は早く終わってしまい、その早さに驚いたポーリーおばさんはトムに褒美としてリンゴをくれる。これはトムのユーモアである。その他にも幼い恋人ベッキーとトムのエピソードなど、多くのユーモアが潜んでいる。この種のユーモアは『トム・ソーヤーの冒険』にみられる、憎むことができない自然児トムの大きな特徴である。

(まつお・やすこ：幼稚園教員養成課程)

「アウル・クリーク鉄橋での出来事」

:南北戦争時代における戦争経験者視点の文学

笠松 准司

アンブローズ・ビアス 「アウル・クリーク鉄橋での出来事」

ペイトン・ファーカー、アラバマ州のある裕福な農園主は今、文字通り死の淵に立たされている。彼は後ろ手に縛られ、首に縄をかけられ、川の急流の6メートルほど上の橋の板に立っているのだ。

この橋の周囲は、橋の両端に「捧げ銃」の構えの歩哨、川の土手には「行進休め」の姿勢の中隊の歩兵らがそれぞれ配置されているが、総じて全く動かず、まるで鉄橋を飾る彫刻のようである。

そう、彼は今まさに陸軍によって絞首刑に処されようとしているのだ。彼の傍らには大尉と軍曹がおり、彼らはシーソーのようになっている渡し板の、ファーカーが立っている方の反対側に立っている。すなわち、彼らの体重だけが今彼を生かしているというわけだ。

板を支える2人のうち、大尉が板を離れた。足の下の川面に目をやると、彼には急流を流木がゆっくり流れていくのが見えた。

「もし両手が自由なら、首の縄を振り捨て、川に飛び込んで森に入り、我が家に帰ることが出来るのに」彼はそう、残してきた妻と子に最後の思いを向けようとした。そこに、極めて鋭い、金床を打ち付けるような音が聞こえてきた。その音は少しずつ間隔を広げ、少しずつ大きくなりながら、規則的に鳴り続けた。

その刹那、軍曹が一步脇に移動した。

さてこの男、ペイトン・ファーカーはいかにしてこのような死の淵におかれているのか。彼はもともとアラバマの奴隷を保有する名高い旧家出身で、一般的な奴隷保有者同様、南北戦争に関しては北部と南部の分離独立を主張し、南側を熱心に支持していた。

しかしながら、彼は都合により、ミシシッピ州コリンズ陥落という大きな作戦に参加できなかった。南側陣営のためならなんでもするという心がありながら何もできずじまいだったわけである。

そんな折に、南軍の軍服を着た兵士が彼の家を訪れた。先の戦闘に参加できなかったファーカーには、現在の戦闘状況を知る絶好の機会だった。

「北軍は現在鉄道を修復しています。やつらはアウル・クリークまでやってきて、鉄橋を修復し、北岸に砦を建設しました。そして司令官はそこらに『鉄道やトンネル、列車に対して妨害をはたらく現場を押さえられた者は、たとえ一般市民であっても即絞首刑に処す』という布告を貼っているんです」

「ここからアウル・クリークまでは、どのくらいありますか？」

「30マイル程でしょう」

「川のこちら側に兵は？」

「川から1キロ程離れた線路沿いに前哨基地があって、鉄橋のこちら側には歩哨が1人います」

「もしですよ、絞首刑に興味のある市民がその前哨基地を迂回して、鉄橋の歩哨を出し抜けたら・・・」ファーカーは笑って続けた、「何が出来るだろう？」・・・

こうしてファーカーはやるせなさのぶつけどころを見つけた・・・かと思われたが、この南軍の軍服を着た兵士は北軍の斥候であったのだ。こうして彼は今絶体絶命の状況にいるのである。

彼は落下した。彼は意識を失い、すでに死んだようなものだった。その状態から、ずいぶん長く感じられる時間の後意識を取り戻したのは、喉に走る鋭い痛みと、それに続く窒息しそうな感覚のせいだった。鋭い、強烈な痛みが、頸から胴体、そして四肢の全細胞を貫いていく。痛みは、その一本一本が具に知覚できる、枝分かれして全身に広がる神経細胞を通して瞬間に伝わり、考えられないほど早い周期でガンガンと脈打ちながら襲ってくるのだった。繰り返し押し寄せる炎の波が、耐えがたい熱さで炙ろうとしているようだ。いっぽう頭は圧迫感、まさに鬱血する感じに襲われていた。思念が入り込む隙などまるでない。持っていたはずの知的な部分は、すでにどこかに行ってしまった。残されたのは、ただ感覚のみ、それも激痛の感覚だけだった。

彼は水中でぼんやりと意識を取り戻し始めた。ロープが切れて生きながらえたのだ！そこから彼は言うことを聞かない体に鞭をうち、逃走する死刑囚を射殺せんとする銃弾の雨を避け、森に入り、家路を急いだ。北軍の追っ手から逃げることで疲れ果て、足は痛み、耐え難い空腹に襲われ、首はロープのあざが付き、酷く腫れ上がっていた。

やがて彼は家にたどり着いた。もう朝になっていた。門を開け、庭を歩いていくと妻が迎えてくれた。

最愛の妻の下へついに帰ってきた。だが彼女を抱きしめようとした瞬間、彼の首筋をすさまじい衝撃が襲った。大砲が放たれたような音がし、辺り一面を燃え立たせたのち、完全なる闇と静寂が訪れた。

ペイトン・ファーカーは死んだ。首の折れたその死体は、アウル・クリーク鉄橋の下で左右にゆっくりと揺さぶられていた。

南北戦争時代における戦争経験者視点の文学

I. 作家と作品について

アンブローズ・ビアス (Ambrose Bierce, 1842-1914?) は、激辛の評論で知られた評論家である。南北戦争には志願兵として参戦しており、戦後からサンフランシスコで夜警の仕事の傍ら文筆家となった。

この作品 (原題: *An Occurrence at Owl Creek Bridge*) では、ビアス本人が南北戦争で見たり聞いたことが活かされているとされている。原文では兵器や軍の命令など (ブドウ弾、捧げ銃など) が極めて細かく、よりリアルになるように要所要所に使用されている。

II. 異常なほど細かい描写、そしてツイスト・エンディング

この作品は、ペイトン・ファーカーという男は生きているという体で進められるが、最後の最後でその全てがファーカーの死ぬ間際の刹那の妄想であったことがわかるようになっていく。これは「ツイスト・エンディング」と呼ばれ、最後の驚くべきクライマックスにより、読み手はもう一度別角度から作品を見直させられる、というものである。しかし、一般的にはツイスト・エンディングを用いた作品は一度最後まで読んでしまうと、もう特に読み直そうとは思わないものだが、この“An Occurrence at Owl Creek Bridge”はそうは思われないのである。

これは原文を見るとわかりやすいが、ファーカーが落とされるシーンの前後では、情景や物体の描写が明らかに細くなっているのである。これは死の間際に走馬灯が見えるように、死刑になる瞬間でも脳が超高速で稼働して、ここまで細かい妄想をめぐらせることができたということ表現しているのであろうが、私はここがこの作品の上手いところなのではないかと考える。

また、私もさも当たり前のように走馬灯を例に出したが、ほとんどの人間はそういった死の淵に立ったことはないのである。人間は知っていることより知らないことの方に意識や知識欲が向きがちであるので、この作品は長い間読まれ続けているのではないかと考える。

もちろん、私はこの作品を人に勧めるときは絶対に結末を教えたり、それどころかどんでん返しであることも教えたりはしない。皆に是非一度、ビアスに驚かされて欲しいからである。

(かさまつ・じゅんじ: 欧米言語文化講座 英語圏)

ジョナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』

:スウィフトがこの本から伝えたかったこと

山崎美紀子

ジョナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』

この話は主に4つの話から成り立っている。主人公はイギリス生まれのレミュエル・ガリバー。ガリバーは子供のころから、「船に乗って外国に行ってみたい!」と思っていたので、航海術や医学などを勉強し、船医となった。

そこでまずは1つ目、小人国（リリパット）の話について。ガリバーはある日南洋へ行くこととなった。航海は順調だったが、途中で暴風雨に遭い、流されてしまう。そして流れ着いた島は小人の国（リリパット）。ガリバーは宮殿へと連行されてしまう。そこで、ガリバーはこの国にとって敵ではないことを証明するために王様の願いを叶えることに。王様の願いとは、長い間続いている隣国（ブレフスキュ）との戦争の終結であった。すぐさまガリバーは「陛下とこの国を守るために命がけで戦いましょう。」と言って隣国へ赴き、軍隊を撃破、そしてついに小人国の信頼を勝ち取った。しかし、ガリバーが大手柄をたてたことにより、ある提督は自分の人気が減ったように考え、ガリバーを恨んでいた。提督はガリバーに様々な難癖をつけて彼を死刑にしようとした。しかし、「彼はこれまで立派な手柄をたててくれたのだから、大目に見て罪は軽くしてやれ。」と王に反対され、結局餓死させることが決まった。そのことを知ったガリバーは、沖に浮いていたボートでイギリスに帰国することとなった。

次の話は大人国（ブロブディンナグ）について。ガリバーはイギリスに戻って2ヵ月もすると、またすぐに旅に出た。航海の途中、水がなくなり、陸が見えたので、ガリバー達船員はボートでその船に向かった。しかし1人でその島を散策していたガリバーは置いてけぼりにされた。そしてその島は小人国とは正反対の大人国だった。ガリバーは身長約18メートルの農夫に捕まえられ、サーカスの見世物のように見せて回らされた後、この国の王妃に売り飛ばされる。王妃はガリバーに大いに愛着を寄せ、住居として人形の家のように家具を備えた木箱を与えるなどして、非常によく待遇してくれた。しかしガリバーは「いつかは自由の身になりたいなあ…」といつも思っていた。そんなある日、ガリバーが王妃や国王たちと南の海岸へ行った時、1匹の鷲がガリバーの住む木箱をくわえ、そのまま飛び去ってしまった。そして木箱は大海原に落とされ、ガリバーは偶然通りかかったイギリスの船に発見され、無事祖国へ帰還することとなる。

3つ目の話は飛島（ラピュタ）について。ガリバーは今まで苦しい目にたくさん遭ってきたが、それでもまだ外国を見たいという気持ちが強く、再び船で旅をすることにした。しかし、途中で海賊船に襲われ、ガリバーは1人小さな船に乘せられ、海に放り出された。近くの無人島にたどり着いたガリバーは隣の島、そのまた隣の島へ渡って行き、4つ目の島で空

飛ぶ島（ラピユタ）に遭遇する。その光景に少し驚いたが、無人島から脱出したかったので、「おーい、おーい」と大きな声で叫んで見つけてもらい、ガリバーはその島に乗せてもらう。ラピユタの人々は、数学や天文学、音楽にしか興味がなく、「太陽の工合はどうでしょう。日の入り、日の出に変わりはありませんか。」「今度彗星がやって来たら、どうしたものでしょうか。なんとか助かりたいものですねあ」というようなことをいつも言い合っており、何か外から刺激を与えなければ物も言えなければ、他人の話を書くこともできない。数学や音楽以外の才能がいくらあっても無意味なこの国では、ガリバーは知能が低い人間だと思われる。そんなある日ガリバーは、ほとんど相手にしてもらえないような国にいたが、たまたまなくなったので、唯一仲良くなった高官に頼んでラピユタから降りる許可をもらい、国王の支配する陸地「バルニバービ」に降り立った。しかしそこはラピユタの影響を受けて荒廃しており、それにみかねたガリバーはイギリスに帰ることにした。その帰り、ガリバーは死人を呼び出すことができる、魔法使いの種族のいるグラブダブドリブという島や、死なない人間「ストラルドブラグ」がいるラグナグ国、そして最後に日本に立ち寄った。この頃日本では鎖国中だったのでガリバーはオランダ人を装い、長崎からオランダ船に乗り、イギリスに帰国することが出来た。

最後は馬の国（フウイヌム）について。イギリスに戻って5ヵ月後、ガリバーはある船の船長になって欲しいと頼まれたので、また旅に出ることにした。しかし、途中で海賊に船を奪われ、無理矢理ボートに乗せられ、ある島に1人置いて行かれた。その島が馬の国だった。ガリバーが島を散策していると、そこには言葉を話す馬がいた。そしてその奇妙な馬に誘われるまま、その後をついて行くと、その馬が住む家に着いた。また、家から少し離れた所に小屋があり、その中にはサルのような全身毛むくじゃらの「ヤーフ」という獣がいた。しかしよく見ると、その獣は人間にそっくりだった。馬たちはガリバーを見て「ヤーフ、ヤーフ」と言ってくるので、ガリバーを彼らの仲間だと思っているようだったが、ガリバーの話を知りたいようだったので、一緒に暮らすことにした。そこで暮らしているうちにガリバーは、馬はととても優しく高貴な生き物で、それに比べて人間はなんて卑しい生き物なのか、と思うようになる。ガリバーは帰国するのはやめて、ずっと馬たちと暮らしたいと思った。しかしそんな思いとは裏腹に、「世の中にヤーフほど不潔で、いやらしいものはない。彼らはこっそり牛の乳を吸うやら、畑を荒らすやら、ろくなことはしない。我々はあのいやらしいヤーフを殺すべきだ。」と議会で馬たちが主張しだした。だが、ガリバーと一緒に暮らしている馬が「こんな大人しいヤーフもいるのだから、ヤーフを皆殺しにするのはかわいそうだ。」と主張してくれたおかげで殺されることは免れ、結局ガリバーを追放せよという議案が可決された。そしてガリバーは仕方なく自分で船を作り、イギリスへと帰国することとなった。

スウィフトがこの本から伝えたかったこと

I. 作者と作品について

ジョナサン・スウィフト（1667-1745）はイギリス人系アイルランド人の司祭であり、風刺作家、随筆家、政治パンフレット作者、詩人、という様々な顔を持ち、数多くの作品を残している。その中でも一番有名なのが『ガリバー旅行記』であろう。この作品は1726年に出版され、正式な題名は『船医から始まり後に複数の船の船長となったレミュエル・ガリバーによる、世界の諸僻地への旅行記4編』

(Travels into Several Remote Nations of the World, in Four Parts. By Lemuel Gulliver, First a Surgeon, and then a Captain of several Ships) である。今では子供向けの本とされているが、実際は、これまでに書かれてきた道徳や品行に対する風刺作品の中でも、最も痛烈な作品といっても過言ではない。

II. 「小人国(リリパット)」から理解すべきこと

リリパット国の社会と政治体制は18世紀のイギリスを表している。またリリパットは隣国のブレフスキュ国と交戦下にあり、これはブレフスキュ国をフランスに見立て、当時のイギリスとフランスの国際上の関係を示しているといえる。この交戦の原因は、「卵をむく時に、大きい方の端を割ってからむくか、小さい方の端を割ってからむくか」という意見の違いである。またこの戦争は、ヘンリー8世の行った処刑や追放刑により始まった※イングランド国教会とカトリック教徒の争いに基づいている。卵はカトリック最高の祝日である復活祭のシンボルとして、キリスト教やその信仰を表しており、卵の大きい方から割ってむく方をカトリック教徒、小さい方から割ってむく方をイングランド国教会としていた。スウィフトは争いの原因を嘲笑し、些細な出来事が大きな闘争に発展する状況を風刺している。

※イングランド国教会：16世紀のイングランドで成立したキリスト教会。もともとカトリック教会の一部だったが、後に独立。通常プロテスタントに分類されるが、典礼的にはカトリックとの共通点が多い。

III. 「大人国(プロブディンナグ)」から読み取れること

プロブディンナグ国の国王も、彼から見たらとても小さくて奇妙な生き物のガリバーに関心を抱き、イギリスの社会や戦争、司法などあらゆる事柄をガリバーから聞き出す。国王にそのような質問をさせることによって、スウィフトはイギリスの諸問題を露わにし、イギリスで施行されていた政策を批判している。また軍隊を全滅させたり、鉄壁を破ることが出来る、火薬の製法を教えようというガリバーの提案はプロブディンナグ国の国王を特に怒らせ、「そのような機械の発明は人類の敵か悪魔のすることに違いない」という言葉から、人類は地球上で最も哀れな種族であるという思慮を国王から導き出すことが出来る。

IV. 「飛島(ラピュタ)」で述べたかったこと

この話では、数学や科学についていつも考えているため上の空であるラピュタ人を描くことによって、理性による思考の普遍性を主張する、科学における啓蒙主義運動を批判している。直接人類に貢献しない仮説的な科学知識は、スウィフトにとって無用の学問であり、その追究に時間や資金を浪費すべきではないと考えていた。またラピュタの国王の支配する陸地「バルニバービ」は、本来豊かな土地であったが、今ではラピュタに搾取され荒れ果ててしまった。バルニバービ各地で人々は反乱を起こしたりするが、その度に国王はラピュタを反乱地の上空に持ってきて、太陽や雨を遮り、場合によっては大石を落として町や人を押しつぶして鎮圧する。このことはロンドンに搾取されるアイルラ

ンドを、また当時実際にアイルランドで起こった反乱を反映しているとされている。

そしてラグナグ王国にいた、死なない人間「ストラルドブラグ」に関して、ガリバーは最初、「自分が不死人間だったら死の恐怖におびえることもなく、どれほど輝かしい人生を送れるだろうか」と思った。しかし不死人間は死なないが、年をとるため老衰から逃れることは出来ず、平均寿命の80歳で法的に死者とされてしまい、以後は世間から厄介者扱いされる、という悲惨な境遇を聞かされ、むしろ死とは人間に与えられた救済なのだと考えるようになった。このことから、スウィフトの「死」に対する考えも知ることが出来る。

V. 「馬の国(フウイヌム)」からわかる人間の愚かさ

馬の種族「フウイヌム」は、仲間の死をそれほど悲しまないなど、大きな悲嘆や戦争、疫病を持たず、エリート主義的かつ官僚的で、厳密な種族的カースト制度を保持している。この制度は話法や風習、外見においてイギリスの貴族性を風刺している。フウイヌムは彼らを悩ませる「ヤーフ」という邪悪で汚らしい生物と対比される。ヤーフは野蛮種族であり、絶え間なく争い、無益な輝く石を切に求めている。この輝く石とは人間社会のお金を意味しているのだろう。またガリバーとフウイヌムは、人間とヤーフを比較し、「特に理由もないのに同種族で争いあうヤーフの習性」と「戦争」のような、この2種族の類似点を発見した。戦争のないこの国で、フウイヌムは大砲や火薬、「攻撃」「破壊」というような言葉をガリバーから説明を受け、人間をもっと嫌いになった。それに対してガリバーは、生まれつき徳の高い性質を持ち、友情や厚意を美德とするフウイヌムを尊敬するようになり、ヤーフと似ている自分が恥ずかしくなった。このことから、スウィフトは人間社会全体を批判していることがわかる。

VI. スウィフトが伝えたかったこと

私がこの本を選んだ理由は、『ガリバー旅行記』は童話だと思っていたが、風刺作品であると聞いたので、そのことについて少し調べたいと思ったからだ。また、『ガリバー旅行記』は小人国の話だけだと思っていたので、他の3つの話もこの機会に知ることが出来て良かった。宮崎駿の映画『天空の城ラピュタ』の「ラピュタ」という言葉が、3つ目の話「飛島(ラピュタ)」から来ているということや、検索エンジンの『Yahoo!』も、4つ目の話「馬の国(フウイヌム)」に出てくる「ヤーフ」から来ているということを知った。

スウィフトは、当時問題の多かった宗教対立や植民地主義、奴隷制度を批判し、人間とはくだらないことで争いあう愚かな生き物であり、動物のほうがずっと良いと考えていたのだろうと思う。科学技術に関しても、確かに技術が進歩することは良いことだが、たくさんの人を簡単に殺せるような兵器を開発するなど、人類に貢献しないような使い方は見直すべきだ。現在でも、人種の違う者同士がこのような兵器を使って争っている。スウィフトは将来、人間を誇らしく思えるようなもっと素晴らしい社会になることを望んでいたのかもしれないが、この作品が書かれた時代から何も変わっていないどころか、悪くなっていることを考えると、やはり人間は愚かだということがよくわかった。

リトールドすることは初めてだったので、最初はどのような風に行けば良いのかわからなかったが、実際に話を全部軽く読んだ後に色々調べていき、作者がこういうことを考えて書いていたのか、ということなどがわかって来ると面白くなってきて書きやすくなった。私自身も普段こういう課題が出された時にしか本は読まないが、これを機に色々本を読んでみようと思った。

(やまさき・みきこ：欧米言語文化講座 仏語圏)

ヨセフ・ジェイコブス「ジャックと豆の木」

:ヨセフ・ジェイコブスと*English Fairy Tales*

大塚麻里

ヨセフ・ジェイコブス「ジャックと豆の木」

むかし、イングランドのアルフレッド時代にロンドンの都から離れた田舎の小屋に夫を亡くした女の人が、小さな男の子の子供とともにわびしく暮らしていた。その子は、のんきでずぼらな子であったが、一人息子なのでとても可愛がっていた。そんな息子を抱えた女の人であったがどういうわけか年々ものが足らなくなり運も悪くなって、牝牛以外の家にあるすべての物を売ってしまった。母親はある日ジャックを呼んで牝牛を売ってくるように言った。なるべく高く売ってこいと言われたにも関わらずジャックは、道で話しかけられた肉屋のおじさんが持っていた袋に入った奇妙な形の豆と交換して家に帰ってきた。母親は呆れて起こってしまいその豆を窓から投げ捨ててしまった。

あくる朝ジャックが目を覚ました時、なんだか外が暗いと思うと、庭に昨日すてた豆の種から芽が生え一晩で丈夫で見上げるほど大きく高く伸びている豆の木が庭いっぱい生い茂っていた。

「あれをつたって、てっぺんまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」

ジャックはそう思い、すぐに登り始めた。何とかいちばん上まで辿りつくくと、静かな森や美しい花がたくさんあるとてもきれいな国が広がっていた。どこからともなく赤ずきんをかぶったおばさんが出てきて、自分たちはジャック一家を守っている妖女でここ何年か魔法にかけられているジャックたちを守ることができなかったという。というのも恐ろしい鬼の大男がすみかにしている、お城のような家があり、じつはその鬼がそのお城に住んでいたジャックのお父さんを殺して城やそのお宝ごと持って行ってしまったからすっかり貧乏になってしまったからだ、と言った。

「だから、もういちど、そのたからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめにあわしてやるのが、お前の役目なのだよ。」

こう言われるとジャックは気持ちがピンと張り、知らないお父さんが懐かしくなってきたかすめ取られたお宝を取り返さなくては、と思った。

ジャックは早速そのお城に行き、出てきた鬼のおかみさんに泊めてもらうようお願いし入れてもらった。すぐに鬼の足音がして暖炉にジャックは隠れた。

「フンフン、イギリス人の香がするぞ。生きてよが死んでよが骨ごと引いてパンにしよぞ。」

鬼の男がご飯の最中におかみさんに持ってこさせた鶏は、生め、というといくらでも金の卵を産むにわとりだった。ジャックはこれはおとうさんのおたからに違いない、と思って鬼が寝てしまった内に鶏を盗み出すことに成功した。それを家に持って帰ると親子はお金持ちになった。

またしばらくしてあのお城に行きたくなり尋ねてみるとあのおかみさんが出てきたがジャックのことは覚えていない様子だったのでまたお願いして泊めてもらった。今度も前と同じ用に鬼が食後に寝ている間に、金や銀のおたからの入った袋を持って帰った。

しばらくの間はジャックは家でおとなしくしていた。でも体がむずむずしてきてまたあのお城へ行き、今度はすっかり別人になって行ったのでおかみさんは騙されて入れてくれた。大男が帰ってくるとあわててお釜のなかに隠れて、大男が匂いをかぎつけて部屋中探しまわり、お釜に手をかけもうジャックはだめだと思ったが、それこそ妖女が守ってくれているかのように、鬼はお釜を開けるのをやめ、おかみさんにご飯を出せと言った。

「にわとりは盗まれる、金銀の袋も盗まれる、しかたない、こんやはハーブでも鳴らすかな。」

ハーブはひとりでになりだし、どんな楽器もこの音色にはかなわないほどきれいな音色を奏でた。ジャックは今まで持ってきたものよりこのハーブがほしくなり、ハーブの子守歌で大男が眠っているうちにジャックは盗みだそうとした。だが今度は簡単にはいかなかった。そのハーブには魔法が仕掛けられていて、持ち出そうとすると、

「おきろよだんなさん、おきろよだんなさん」と言い出して、大男は起きだしてしまった。

「待て小僧、きさま、にわとりをぬすんで、金の袋、銀の袋をぬすんで、こんどはハーブまでぬすむのかあ。」と、大男はわめきながら、あとを追いかけた。

「つかまえるものならつかまえてみろ。」

ジャックはハーブがからんからん鳴り続ける中一生懸命逃げた。豆の木のはしごの所までたどりつきハーブをかかえて、豆の木のはしごをおり始めた。はるか目の下に、おかあさんが小屋の前で泣きはらした目で空をみつめていた。そうこうするうち、大男が追っついてきてジャックは母親に斧を持ってくるように言った。身軽なジャックは途中ではしごを飛びおり斧ではしごの根元をぷつぷつ折ってしまうと、そのまま鬼は目を回して死んでしまった。

そのときあの時の妖女がきらびやかな雰囲気のととてもきれいな女性になって現れ、あの時の豆がジャックの手に入るようにしたのは、自分がジャックを試したかったからと言った。

「あのとき、豆のはしごをみて、すぐとそのまま、どこまでものぼって行こうという気をおこしたのが、そもそもジャックの運のひらけるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり、ふしぎだなあとおもってながめたり、すぎてしまえば、とりかえっこした牝牛は、もし手にもどることがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらさなければならぬ。だから、豆の木のはしごをのぼったのが、とりもなおさず、幸運のはしごをのぼったわけなのだよ。」

ヨセフ・ジェイコブスと*English Fairy Tales*

I. 作者と作品について

「ジャックと豆の木」(“Jack and the Beanstalk”)はイングランドの民話集*English Fairy Tales*に収録されている話のうちの一つである。この民話集は大英博物館にあったアングロサクソンの話を再話したものである。イギリスに伝わる40のおとぎ話を集めたもので、他の国に伝わる「3びきの子豚(The Three Pigs)」「赤ずきんちゃん(Little Red Riding Hood)」等

有名な話もいくつか収録されている。

ヨセフ・ジェイコブス(Joseph Jacobs, 1854-1916)は文学研究者でありユダヤ人歴史研究者であった。ユダヤに関する事典を作成し、また民話集も作った民族学者である。

オーストラリア・シドニーでジョン・ジェイコブスの6番目の息子として生まれ、シドニーグラマール学校とシドニー大学に通い18歳の時イングランドへ発ちケンブリッジのセントジョン大学へ入る。ロシアでのユダヤ人の迫害に関する一連の記事の作家として有名になり、後にユダヤ人の人種に関する文化人類学の研究に多くの時間を費やしこの分野で権威となった。

1890年から5つの民話集を編集し始め、ドイツ文学やフランス文学を主に読んでいたイギリスの子供たちにそれを読んでほしいと思っていた。また彼はグリム兄弟にも影響を受け、そしておとぎ話という名目で多くの珍しい種の民話を集めた。イギリス民話が今日多くの人々に親しまれる形で保存された事については、ジェイコブスの功績がきわめて大きいといわれている。

II. 時代背景、イギリスとドイツ

ジェイコブスはグリム兄弟に影響を受けたと同時に、ドイツという国に対抗意識を持っていたため彼の作品はグリム童話集を意識しているといわれている。イギリスにおいては、民話集や童話集に対し国家的に動く人物が、ジェイコブス以前にいなかったため、イギリス童話集の出版事業としての成立が、ドイツより遅かった。そのためイギリスの子供はドイツ文学を主に読んでいて、このことはドイツを意識しているジェイコブスにとって民話集を編纂しようとした1つの理由なのではないだろうか。ジェイコブスがドイツを意識していた理由としては、イギリスが産業革命で波に乗っており、ドイツは国をあげて追いつこうとしていた。そしてジェイコブスがこの民話集を出版した1890年は、ドイツが、鉄鋼生産力で、イギリスを抜き、逆に産業において抜かされたイギリスはドイツに対抗していた、というところだろうか。

III. この作品が伝えたいこと

イソップ寓話では教訓が強くこめられているが、この作品は民話で、民間で伝わっている話をもとにしているので教訓というよりは話の面白さを重視している。だが私の主観では、ジャックが思い立った時に行動に移している点が、お宝を盗み出すことに成功した鍵なのではないかと考える。妖女の発言にもあるように、豆の木を見てすぐに登っていき結果的に家を救ったジャックのように、ためらったり考えすぎたりすることなくすぐ行動に移すことが悪い状況から抜け出す鍵なのではないかと感じた。

(おおつか・まり：欧米言語文化講座 英語圏)

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』 (ウサギの穴に落ちて)

:作品の魅力

岸田美沙子

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』(ウサギの穴に落ちて)

「あーあっ、つまんない」 アリスはおねえさんと一緒に土手に座っています。だけど、おねえさんは文字づくしの本を読んでいるだけ。すると突然、ピンクの目をした白いウサギがアリスの横を駆けていくのです。「大変だ！大変だ！遅れちゃうー」とポケットから時計を出し時間を確かめて慌てて駆けてくウサギ。アリスはとっってもおもしろくなってウサギの後をつけていきます。ちょうど生垣の下の大きな穴へウサギがひょいっと飛び込みました。もちろんアリスも飛び込みます。いったいどこに出られるのか、なんて考えずにね。アリスは深い井戸のような空間をゆっくりゆっくり下へと落ちていき、やっと着地しました。どうやらウサギを見失ってしまったようです。そこにはたくさんの扉が並んでいます。だけど、どれもカギがかかっていて開きません。あれ？気がつくともアリスの目の前にテーブルがありました。そしてその上には金色の小さなカギがありました。アリスは1つ1つの扉にカギを試してみます。しかしどれも合いません。すると最初にはなかった、とっっても小さな扉を見つけます。高さ40センチの小さな扉。カギを差し込んでみると、やったー！開きました。そこから外の世界をのぞいてみるとアリスが今までに見たこともないキレイなお庭が広がっていました。かわいいお花が咲き誇っている花壇に、キレイな噴水。アリスはその庭へ行きたくてたまらなくなりました。でも高さ40センチの扉はアリスにはとても小さいものでした。気を取り直してもう1度部屋のなかを見回すと、さっきのテーブルの上にピンが置いてあります。ピンには「わたしを飲んでね」という文字がありました。アリスは少し不安に思いましたが、ピンのどこにも「毒薬です」という文字がなかったので飲んでみることにしました。「あれー？へんだなあ。この感じ」そうです。アリスの身体はスモールライトで小さくなったように縮んでしまったのです。身長は25センチ。これならあの扉をくぐってキレイな庭へと行くことができます。しかし、あーあ、かわいそうなアリスちゃん。庭へと続く扉のカギをテーブルの上に置いたままでした。身長25センチのアリスには到底手が届きません。アリスはかなしくなって涙を流していましたが、ふとテーブルの下に小さなガラスの箱が見えたのです。ふたを開けるとケーキが入っていました。中にはまた「わたしを食べてね」の文字があります。よし、食べてやろう！アリスはそう決意してケーキをむしゃむしゃ食べました。

作品の魅力

I. 物語の成り立ち

『ふしぎの国のアリス』(原題)という作品は、作者がイングランドでの旅路に即興で語った物語がもとになっている。ボートでの旅の道程で、一緒に旅をしていた少女たちにせがまれて語り始めたのが“アリス”という主人公を中心に展開するふしぎの国の物語である。本の冒頭にはこの物語を少女たちに語り始める前のやりとりや経過が書かれている。最後に、「アリス(少女の中の1人の名前)この子供の話を君にあげよう。やさしい手で、これを置いておくれ。子ども時代の夢が、思い出の神秘のリボンの編まれているところに。遠い土地でつまれ、しおれてしまった巡礼の花冠のようにね。」と記されている。現在も世界各地で愛されている物語として『ふしぎの国のアリス』が現存していることから、作者の願いは叶ったように思われる。

II. ふしぎの国のアリスに影響を受けた現代の作品

狂っているけど新しい、ふしぎの国(文中から引用)のストーリーは、アリスがおかしなウサギを見つけ興味を抱き、あとを追いかけて穴へ落ちるところから始まる。本作の原題の直訳が『ふしぎの国のアリスの冒険』とあるように、落ちた穴の中の世界で冒険が始まるのだ。『マトリックス』というアメリカ映画の監督であるウォシャウスキー兄弟は、映画マトリックスシリーズは『ふしぎの国のアリス』がテーマであると述べている。この映画には仮想現実と現実世界という2つの世界が存在している。アリスの世界では《穴》が2つの世界の境界になっているが、映画では《現代的な装置》が世界間を行き来する道具となっている。また、映画の中で主人公が「follow the white rabbit (白ウサギに付いて行け)」というメッセージを受け取るという明らかにアリスの世界を連想させるシーンもある。

III. ふしぎの国の中での出来事

だれもが知っているアリスの物語。チシャネコやランプの兵隊、おかしなクリケットのゲーム…。こんなはちゃめちゃな世界を考えだせるのは子どものような遊び心も持った人なのだろうなと思う。誰だって子どもの頃は、空想していたはず。私の将来の夢はセーラームーンだった。大人になっていくにつれて、忘れ去られてしまうかもしれない夢かもしれない。けれどアリスがウサギの穴に落ちこちてふしぎの国を体験したかのように、私の目の前で大慌てでウサギが通るかもしれない。そっちの世界では動物もみんなお喋りするかもしれない。そんな可能性は誰にも否定できないと思う。もしそんなことが起こったらアリスみたいにワクワクしながら冒険してみたい。けれどこっちに戻ってきて誰かに話しても信じてもらえないのだろう…。夢だったと自分でも思うようになるかもしれないけれど、子どもの頃みたいに限界を知らずにいろんなことを楽しめるような気がする。そんな気持ちにさせてくれる本だ。平凡な毎日が退屈な人には是非読んで欲しい物語である。

(きしだ・みさこ：欧米言語文化講座 仏語圏)

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』

:唯一無二のファンタジーの世界へ

山脇未帆

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』

アリスはお姉さんと一緒に、土手の上に座っていました。本を読んでいるお姉さんの隣で何もすることがないアリスは、退屈で堪らなくなりました。あれこれ考えていると、ピンクの目をした白ウサギが「ああ、困ったな。遅刻しちゃうぞ！」とポケットから時計を取り出し、慌てて飛んでいきました。好奇心でいっぱいになったアリスはウサギを追って大きなウサギ穴に飛び込みました。ウサギ穴はしばらく続きました。周りの壁には戸棚や本棚がびっしりと並んでいます。下に落ちていく中、自分はいま地球のどのあたりにいるのか、ネコのダイナについてなど、一人でおしゃべりしていました。そのうちこっくりこっくりしていると、アリスは小枝と枯れ葉の山の上に墜落していました。相変わらず急いでいる先ほどのうさぎを追いつけると、天井の低い細長い広間に出ました。どうしたら外に出られるか考えていると、小さなテーブルの上に小さな金の鍵を見つけました。多くの戸の中から低いカーテンの吊り下げた40センチくらいのドアを開け、外に出ようとしたのですが、頭さえ出ません。テーブルまで引き返すと、今度は小さなびんを一本見つけました。それを飲むと、アリスは25センチくらいの背丈になっていました。ドアからでようとしたのですが、テーブルの上から金の鍵を取ることを忘れてしまったのです。泣き、自分を叱りながらも、テーブルの下に小さな箱に入ったケーキを見つけました。そのケーキをあっという間に平らげると、アリスの背丈は3メートル近くになりました。かわいそうに、また外に出ることができなくなったアリスは泣き出してしまいました。あまりにも泣いたので、おしまいには深さ10センチ、広間の半分くらいもある、大きな涙の池ができました。

しばらくすると、さっきの白ウサギが白い手袋と大きな扇を持って大急ぎで走ってきました。アリスが声をかけるとウサギは驚いて扇と手袋を落とし、暗闇の中に逃げこみました。アリスは部屋が暑かったので扇で扇ぎながらひとりおしゃべりしていると、扇の力で背丈は60センチくらいになりました。そういつているうちにアリスは足を滑らせ、先ほどできた涙の池にあごまで浸かっていました。他にも落ちてきた鳥や獣たちと一緒に、アリスは岸まで泳いで向かいました。岸にたどり着くと、動物たちとアリスは体を乾かす為に「わいわい競争」を始めました。「わいわい競争」とは、好きなときにスタートし、好きなときにやめるレースのことです。30分ばかり走って、ドーデー鳥の合図とともにレースは終わりました。誰が優勝者かわかりませんから、全員が商品をもらい、アリスも指貫をもらいました。その後はネズミの身の上話を聞きました。しかし、アリスが飼い猫のダイナはネズミや小鳥を捕るのが得意だ、と話してしまったものですから、動物たちは逃げ、アリスは独りぼっちになってしまいました。アリスがまた泣いていると、遠くの方でかける足音が聞こえました。足音の主は例の白ウサギでした。白ウサギはアリスを「メアリー・アン」というお手伝いさんと間違えたらしく、家から扇と手袋を持ってくるよう命令しました。走りながら独り言を呟いているうちに、アリスは白ウサギの家にとどり着きました。大急ぎで2階に上がると、扇と手袋、小さなびんを見つけました。そのびんの中身を飲むと、アリスは大きくなり、部屋の中いっぱいになってしまいました。部屋に入れない白ウサギとトカゲのビルは、手押し

車いっばいの小石をアリスに向かって降らせました。驚いたことに、床に散らばった小石はお菓子に変わっていきました。お菓子を食べると体は縮み、家から出られるようになりました。家の外にいた動物たちから逃げるように森の中へ進むと、大きなキノコを見つけました。森に住むイモムシによると、キノコの一方を食べると大きくなり、一方を食べると小さくなるらしいのです。キノコの右側を食べてみると、なんとアリスの首が伸びてしまいました。何度もキノコを食べているうちに元の背丈に戻りましたが、高さ1メートルほどの家を見つけたのでもう一度縮み、家に近づきました。

カエルの召使いに邪魔されながらも家に入ると、公爵夫人と赤ん坊、料理女、チェシャー・ネコがいました。女王様とクローケー遊びをする準備を始めた公爵夫人から赤ん坊を預かったアリスでしたが、あやしているうちに赤ん坊は豚に変わってしまいました。豚を逃がしてやると、2,3メートル先の木の枝にチェシャー・ネコが座っていました。チェシャー・ネコに三日月ウサギの家を教えてもらおうと、アリスは三日月ウサギの家を目指しました。ウサギの家の前の木の下で、三日月ウサギと帽子屋、ネムリネズミがお茶会をしていました。帽子屋が言うことには、〈時〉の機嫌を損ねてしまったので、いつでもお茶の時間になってしまったということでした。次にネムリネズミの話を知りましたが、あまりにも頭がこんがらがったので、アリスはすっかり愛想を尽かし、お茶会から離れていきました。

気が付いてみると、ちょっと前にいた、あの細長い広間にいました。金の鍵を使って小さな扉を開けると、そこには美しい庭が広がっていました。すると大行列が見えました。ハートの王と女王がしんがりです。ハートの女王は気に入らないことがあると、すぐにそいつの首をはねてしまう恐ろしい女王です。その女王にクローケーに誘われたアリスは行列に加わりました。クローケー場に着くと、アリスは驚きました。一面畝だらけ、クローケーのボールは生きたハリネズミ、ボールを打つクラブは生きたフラミンゴなのです。ゲームにならないので、アリスは突如空中に現れたチェシャー・ネコと話をしていました。女王を上手く言いくるめて、女王に捕まっていた格言好きの公爵夫人と話した後、アリスはカメモドキに身の上話を聞くため女王と歩いていきました。そこにはグリフォンがいました。女王はグリフォンにアリスをカメモドキの元へ連れて行くよう命令し、去っていきました。少し歩くと、カメモドキが小さな岩棚の上にしょんぼり座っているのが見えました。アリスはカメモドキから、カメモドキが最高の教育を受けた話、エビダンスの話を知りました。グリフォンとカメモドキが実際にエビダンスを披露してくれたりもしました。カメモドキの歌を聴いていると、遠くから「裁判が始まるぞ！」という声が聞こえてきました。

アリスとグリフォンはすぐに法廷に行きました。裁判の内容は「ハートの女王が作ったパイをハートのジャックが盗んだ」というものでした。法廷には裁判官の王、陪審席には12匹もの生き物がいました。裁判が始まると第1の証人として帽子屋が呼ばれました。第2の証人として、公爵夫人の料理女が呼ばれました。しかし、裁判の決着はつきませんでした。最後に第3の証人として、進行役の白ウサギがキーキー声をふりしぼってこう読み上げたのです。「アリス！」アリスはとても驚きましたが、王からの質問に、この件について何も知らないと答えました。アリスの証言が重要かそうでないかを陪審員が考える中、白ウサギが「ジャックが犯人だ」という証拠の手紙を持ってきました。その手紙の筆跡はジャックのものではなく、内容も不審な点がいっぱいです。しかし、どうしてもジャックを犯人としようとする女王と、アリスは対立しました。女王はアリスの首をはねよと兵士に命令しました。しかし、アリスも反論しました。このとき、アリスの背丈は元に戻っていました。「あんたたちって、みんなただのトランプじゃないの。」

気がついてみると、アリスはいつもの土手で、お姉さんのひざを枕に寝ていました。アリスは夢を見ていたのです。アリスはこの〈ふしぎの国〉の話をお姉さんに聞かせました。アリスが家のほうに走っていくと、お姉さんはアリスに聞いた話を思い返し、自分も夢の中にいる気持ちになりました。やがてアリスが大人になったときのことを思いました。アリスは大人になっても、子どもの無邪気な心、優しい心を失わないでしょう。

唯一無二のファンタジーの世界へ

I. 作者と作品について

ルイス・キャロル (Lewis Carroll) は、本名をチャールズ・ラトウィッジ・ドジソン (Charles Lutwidge Dodgson) といい、1832年1月27日、イギリス西部のチェシャー州デアズベリー牧師の家に、11人兄弟の長男として生まれました。名門のラグビー校で学んだ後、名門オックスフォード大学を数学は首席で卒業しました。卒業後は、母校のオックスフォード大学のクライスト・チャーチ学寮で数学を教え始めました。このように、キャロルの専門は数学でしたが、文学にも強い関心を持っていました。

キャロルは内向的な性格の上、片方の耳が遠かったせいもあり、普段は無口だったと言われていました。しかし、小さな女の子たちを相手に楽しいお話を聞かせてやったり、折り紙をすることは好きでした。『ふしぎの国のアリス』は、そうした少女たちとのふれ合いから生まれた物語です。

学寮長の3人娘、ロリーナ (13歳)、アリス (10歳)、イーディス (8歳) にせがまれて始めたお話が、2番目の娘を主人公にした『地下にもぐったアリスの冒険』というお話でした。このお話が『ふしぎの国のアリス』の元になったお話です。やがてキャロルの友人であるジョージ・マクドナルドの強いすすめによって〈ブタとコショウ〉、〈調子の狂ったお茶の会〉、〈だれがパイをぬすんだか〉、〈アリスの証言〉を書き加え、題名も『ふしぎの国のアリス』に変え、出版されました。

II. 作品が愛される理由

『ふしぎの国のアリス』が不朽の名作として愛されるのには、いくつかの理由があると思います。

まず、登場人物が個性豊かに、生き生きと表現されている点です。独り言のアリス、いつもにやにや笑っているチェシャー・ネコ、すぐに「首をはねよ」とわめいているハートの女王…実際には存在しないはずなのになぜか親しみやすく、身近に感じられます。

次に、この物語には童話にありがちな道徳や教育、感傷のにおいが全くないことです。そのため、誰にでも読みやすく、描かれているエピソードをそのまま純粋に楽しむことができます。

最後に、ことばがまるでパズルのようになっていておもしろい点です。アリスとその他の登場人物の対話はとても愉快で、おもわず笑ってしまったりします。急にとんちんかんなことを言い出したりもしますが、それこそがこの物語の魅力でもあるのです。

このように、他の作品と違い理屈抜きに楽しめるからこそ、出版から120年以上経った今日でも愛されるのではないのでしょうか。読んでいるうちに自分もふしぎの国へいるような気持ちになります。

(やまわき・みき：幼稚園教員養成課程)

アリス・ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』

:ウェブスターの伝えなかったこと

福井 佑那

アリス・ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』

—あしながおじさま、あなたはどこにいらっしゃるのですか？わたくしはとても寂しくなりません。ああ、おじさまにお会いしたいわ！そうすればおたがいにかなししいときにはなぐさめあえますのに！—

物語の主人公、ジルーチャー・アボット、ジュディは物心がついたころから、高校卒業の時までずっと、孤児院におりました。「孤児ですって？それはかわいそうに！」あなたはきっとそう思うでしょうね。でもだからといって、あなたが『かわいそうな、孤児のジュディちゃん』を理解してあげるのは少々骨が折れるところではないでしょう。ジュディはこれまでの孤児院での18年間の暮らしを、ものすごく退屈かつ単調に感じていました。

誰だってそうでしょう？好奇心旺盛な思春期の時期に、自由も与えられない、窮屈な牢屋のような場所に閉じ込められたならば、絶望的になるはずですが。しかし、ある日そんな彼女に嬉しい出来事が起こるのです。孤児院評議員の中の一人の、金持ちのある男が「彼女を大学に行かせたい」と、孤児院に申し出たのです。一体誰が…？という疑問はひとまずおいておきましょう。その男のいうことときたらこうです。ジュディを作家にする。彼女の食費と月謝は、直接大学へ払い込む。在学中の四年間、月に35ドルのおこづかいをあげる。その代わりに、彼はジュディに、お礼として、お金ではなくてあいさつの手紙を月に一回、自分に郵送するように要求しました。それも、もし彼女の両親が生きていたら、両親にむけて書くような手紙を。

彼女は夏季の休暇が終わると、『お金持ちで親切な評議員さん』のお陰で、大学に通い始めます。そこが彼女にとってどのような場所に見えたか、私たちはただ想像するしかありません。きっと、毎日が光り輝いていて、驚きの繰り返しだったに違いありません。この様子を伝えるには、ジュディの『あしながおじさん』への手紙を読めば話がはやいでしょう。

—わたくしは大学が大好きです。そしてわたくしをここへ入学させてくださったおじさまが大好きです。わたくしはとても幸福で、眠る暇もないほど一刻一刻を楽しんでいます。世の中にこんなところがあるなんて夢にも思いませんでした。—

そうそう、『あしながおじさん』の説明がまだでした。この人は当然、ジュディを学校に入れてくれた評議員さんのことです。この人は少し風変わりなのでしょうか。自分のことを話したがる人なのです。ですから、ジュディにはこの男の人の名前、顔、好きな食べ物…なにも知りません。背が高くて、お金持ちで親切であるということ以外は。そこでジュディはこの評議員さんのこのあだ名を決めたのです。

ジュディが愛称でつけたこのあだ名。名前はものがたりの最後までずっと変わらないのですが、ジュディが『あしながおじさん』に対して抱く感情の変化に注目してください。ジュディが手紙を書けば書くほど、彼女は彼を身近に感じ、さらには唯一の自分の理解者である

という、自分の家族のような感情を抱いていくのです。

さて、『あしながおじさん』の名前についてのエピソードはこれくらいにして、ジュディの大学での新しい生活の話に戻しましょう。

とはいっても、彼女の大学での一コマ一コマを事細かに説明している時間は残念ながらありません。(できることなら、原作同様、彼女の毎日を一から書いてしまいたいのですが！)

ですから、彼女の大切な友達を紹介したいと思います。

一人目は、サリー・マクブライド。彼女は、ジュディと同じ寮に住んでいて、ジュディが大学に入学しておそらくは初めての友達です。赤毛で鼻が少し上を向いていて、とても親切なサリー。後にジュディとかなり親密になり、彼女を実家へ招待したりもします。彼女の家族もまた皆親切で、とても温かい家庭なので、ジュディはそれは居心地が良かったのです。もう一人の友達、ジュリア・ペンドルトンもジュディの友達です。彼女は少しプライドが高く、初めは固く怒った態度をジュディに出しますが、後には、ジュディと次第に打ち解けます。彼女はニューヨークの一流の家柄の人です。そして、ジュディには、この、ジュリアを通しての出会いもありました。彼女の叔父さん、ジャービス・ペンドルトン(ジャービーぼっちゃん)です。なぜ『ぼっちゃん』なのかは、後で原作を読めばわかりますよ。ジュディのジャービーぼっちゃんの初めの印象は、「背が高く、ほっそりしていて、内に不思議な微笑みをひそませる、ずっと以前から知っているように感じさせる、とても人付き合いの良い人」であると言っています。とにかく、この『ぼっちゃん』とジュディは縁あって、共に長い時間を一緒に過ごします。その中でももちろんジュディは、ぼっちゃんの頑固で、変わり者な面にも気付きますが、二人が離れ離れになって初めて、彼女はぼっちゃんの存在の大きさに気付いたのです。ああ！ジュディが14歳も年上の男の人に恋するなんて！この恋の結末は…？皆さんから沸き起こる疑問に「ご想像にお任せします。」と答えたいところですが、「気になって眠れない！」という人のために、こっそり教えることにします。

『この恋の行方』＝『この物語の結末』。

つまり、「あしながおじさん」＝「ジャービーぼっちゃん」。

ジュディは「あしながおじさん」その人に恋をしていたのです！

ウェブスターの伝えたかったこと

この物語の作者、アリス・ジーン・ウェブスター(Alice Jean Webster)は、社会施設の改善家としても活躍していたようです。少年教護院や、刑務所を改善する特別委員にも選ばれ、彼らに経済的な援助までしていたとも言われています。このような経験をふんだ作者であるからこそ書ける、この物語のはじめの部分。ここには、彼が実地に見聞した当時の孤児院の生活がリアルに描かれています。でも彼が伝えたかったのはそこだけではないのです。

—主人公のジュディが、孤児院にいながらも、朗らかさ、素直さ、愛らしさを傷つけられることなく持ちながら、今まで知らなかった世界に足を踏み入れ、そして様々な経験をして、立派な女性に成長するという楽しいこの物語。—

そこからは、作品全体を通して、ある一つの“愛のかたち”が表現されているように思います。平和で、温かい作品であることこそ、約一世紀たった今でも愛されるその理由なのではないでしょうか。

(ふくい・ゆうな：欧米言語文化講座 独語圏)